

越路町文化財報告書第 21 輯

岩 田 遺 跡

第 2 次発掘調査報告書

1997

越路町教育委員会

序

平成3年、当町にとっては初めての平安時代の遺跡調査である岩田遺跡の発掘調査を行ったのが7年前のことです。

今回も帝国石油株式会社のガス井戸掘削に伴う調査で、前回に隣接した狭い区域の発掘でありましたが、当時説明が不十分でありました先人の文化遺産が半歩前進した形でその姿を表してくれるとの期待感を持ち遺跡の性格把握に特に留意したところです。

前回同様平安時代の集落跡が発見され、中でも「田部」と記されたものを筆頭に数多くの墨書土器が出土、又、ほぼ完全な形で井戸跡が発見され、中から数々の遺物がみつきり当時の人々のくらしぶりを彷彿とさせる貴重な発見がありました。

故中村孝三郎先生の著作に「岩田窯址」と記されるほど平安時代の土器が大量に出土する当遺跡の特徴を追認するかのように数多くの須恵器が発見され、さらには遠く佐渡の窯跡で焼かれた大きな甕も多量に出土し、当時の流通・生産の形態を知る上で興味深い位置付けとなるのではないかと推測されます。想像を逞くすると農民層の集落遺跡ではなく、古代九世紀の里長の館との想いにいたり今後の調査に興味をつないでいます。

前回に引きつづく2度目の発掘調査ということで県教育庁文化行政課、県埋蔵文化財調査事業団のご指導、ご支援をいただき乍ら当町教育委員会石坂圭介学芸員を中核に調査班を組織し実施いたしました。

晩秋の不安定な天候の間隙をぬっての作業に地元大字沢下条、飯塚の区当局、作業員及び帝国石油株式会社の献身的、全面的なご協力をいただきましたことに満腔の敬意を表す次第です。

飽食文化に浸り切った現代人にとって古代のくらしに馳せるロマンは限りない思いであります。埋蔵文化財は国民共有の財産であることを確認し、本書の成果が当町の古代史解明にとどまらず越後の古代史研究の一助になることを願って止みません。

平成9年11月

越路町教育委員会

教育長 佐藤周一

例 言

1. 本書は、新潟県三島郡越路町大字沢下条岩田68番地ほかに所在する、岩田遺跡の第2次発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、帝国石油（株）新潟鉱業所による天然ガス井掘削に伴うもので、越路町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査から本書の刊行に至る費用はすべて帝国石油（株）新潟鉱業所が負担した。
4. 遺物等の注記は第1次発掘調査である1991年度調査分と区別するために「IT96」とし、他に調査区、グリッド、遺構名を記した。
5. 遺構番号は、掘立柱建物：SB，土坑：SK，溝：SD，井戸：SEについては記号の後に通し番号を付し、ピット：Pについては、SB・SRごと、小グリッドごとに番号を付した。
6. 遺構平面図は、前回の調査のグリッドを踏襲し、平板測量、遺り方測量で実測した。
7. 墨書土器の文字の解読については新潟大学教授の小林昌司先生に指導をいただいた。
8. 本書の執筆については、第5章をバリノ・サーヴェイ株式会社から執筆いただき、他を調査担当が執筆した。
9. 発掘調査から本書作成に至るまで、帝国石油株式会社新潟鉱業所の多大なるご理解とご協力を賜った。また、下記の方々には様々なご教示を賜ったほか、各種の便宜をはかっていただいた。ここに記して厚く御礼申し上げる（個人・組織別、あいうえお順）。

安藤正美、荒川隆史、小熊博史、金子拓男、春日真実、神林昭一、北村 透、駒形敏朗、坂井秀弥、佐藤雅一、品田高志、田中 靖、田村浩司、寺崎裕助、土橋由美子、中野 純、広井 造、山本 肇、渡辺明和、渡辺秀男、渡辺ますみ、大字飯塚、大字沢下条、新潟県教育庁文化行政課、新潟県埋蔵文化財調査事業団、三島町教育委員会、元町町内会

調 査 体 制

調査主体	越路町教育委員会	教育長	佐藤周一
事務局	“		竹内正夫（事務局長）
	“		金子 修（係長）
調査担当	越路町教育委員会		石坂圭介（主事）
現場作業スタッフ	逢見圭子、大塚吉子、大森政一、小林節子、白井綾子、陶山金一、陶山辰雄、田中佐和、田中康夫、中村芳江、半藤明美、平石ヨシ、深井秀子、藤塚修次、藤塚富太、丸山京子、丸山忠吉、吉岡昭登、吉岡 勇、吉岡シイ、渡辺利幸、渡辺マサ		
整理作業スタッフ	逢見圭子、白井綾子、半藤明美、深井秀子、丸山京子、山崎朋子		

目 次

序	
例言	
第 I 章 調査に至る経緯	1
第 II 章 遺跡の位置と第 1 次調査の成果	3
第 1 節 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第 2 節 第 1 次調査の成果	3
第 III 章 調査の経過	5
第 1 節 調査の経過	5
第 2 節 グリッドの設定	6
第 IV 章 発掘調査の概要	7
第 1 節 基本層序	7
第 2 節 検出された遺構	8
第 3 節 出土遺物	12
第 V 章 岩田遺跡第 2 次調査における自然科学分析調査報告	18
第 1 節 調査課題および分析方法	18
第 2 節 柱材・木製品の樹種	18
第 3 節 井戸から出土した種実の種類	20
第 4 節 漆膜の分析	22
第 VI 章 まとめ	24
註	25

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡の位置と周辺の遺跡①・②・③	2
第 2 図 調査区設定図	4
第 3 図 グリッド設定図	6
第 4 図 基本土層図	7
第 5 図 A 地区・B 地区接合関係図	11
第 6 図 カメ類口縁部	12
第 7 図 須恵器胎土別グラフ	17
第 8 図 須恵器・土師器口径-高さ、口径-底径相関グラフ	17

表 目 次

第1表	作業工程表	5
第2表	掲載遺物観察表 須恵器	14
第3表	” 墨書	15
第4表	” 土師器	15
第5表	” 土 鍾	16
第6表	” 近世陶器	16
第7表	樹種同定結果	19
第8表	種実同定結果	22
第9表	蛍光X線分析による定性分析結果	23

図 版 目 次

(図面図版)

- 図版1 A地区遺構全体図・その他遺構エレベーション図
- 図版2 B地区遺構全体図・その他遺構エレベーション図
- 図版3 C地区遺構全体図・個別遺構平面図・断面図
- 図版4 出土土器実測図(1)
- 図版5 出土土器実測図(2)
- 図版6 出土土器実測図(3)
- 図版7 出土土器実測図(4)
- 図版8 出土土器実測図(5)・墨書土器・土鍾・近世陶器実測図
- 図版9 カメ類拓映図
- 図版10 井戸枠・木製品実測図

(写真図版)

- 図版11 遺跡遠景・近景
- 図版12 作業風景・基本土層
- 図版13 個別遺構等
- 図版14 ”
- 図版15 ”
- 図版16 出土土器(1)
- 図版17 出土土器(2)
- 図版18 出土土器(3)
- 図版19 漆膜
- 図版20 木材(1)
- 図版21 木材(2)
- 図版22 種実
- 図版23 漆膜(1)
- 図版24 漆膜(2)

第I章 調査に至る経緯

岩田遺跡は新潟県三島郡越路町大字沢下条岩田68番地ほかに所在する。昭和27年に越路町文化財調査専門委員の神林昭一氏によって発見された平安時代の遺跡で、昭和32年新潟県教育庁文化行政課へ報告され、周知の遺跡となった。

一方、本遺跡近辺の小千谷市片貝から長岡市親沢に至る一帯は、天然ガスの埋蔵量全国一を誇る地域であり、昭和50年代以降国産エネルギーの確保という国策により天然ガスの採取が各地点で行われている。

帝国石油（株）新潟鉱業所（以下帝国石油という）は、この地域で天然ガスの採取を主導的に進めて来た企業の一つであるが、大字沢下条岩田地内においてガス井掘削の計画を立て、同地が岩田遺跡の範囲にあたるため越路町教育委員会（以下町教委という）に対してその計画を示すとともに、埋蔵文化財の取り扱いについての協議をしてほしい旨願い出た。この計画に対し、町教委では対応についての検討を重ね方策を模索した結果、平成2年12月に新潟県教育庁文化行政課から試掘調査を実施していただき、これに基づく本調査を平成3年4月から5月にかけて中村孝三郎氏を調査団長にお願いして町主体で実施することにした。調査は数々の発見を見ながら予定どおり行われ、また、報告書も翌平成4年3月に刊行されている（註1）。

さらに、帝国石油では、昨今の天然ガス需要の大幅な伸びに対し、安定した供給体制を維持するための新たな坑井を掘削する必要性が生じた。地下条件及び地下の掘削対象地点の位置などを勘案し、岩塚-1号井（第1次発掘調査の後に掘削された試掘井）を本格的な採掘井とすることが最適という結論に達した。この結論から帝国石油は、平成8年7月、当地での埋蔵文化財の取り扱いについての協議のため、町教委にそのおおよその計画を示して問い合わせた。町教委は、開発対象地は、第1次発掘調査の範囲に隣接し、かつ、県の実施した確認調査で特に遺物が集中的に発見された部分にあたるため、遺跡が所在することは確実で、当該箇所が掘削などにより損なわれる場合は、発掘調査が必要となる旨回答した。これを受け、帝国石油では具体的な開発計画を組み立て、最も掘削を小規模にすませる工法と施設を模索し、平成8年8月具体的な開発計画を町教育委員会に示すとともに、それに伴って掘削工事する部分の発掘調査を依頼した。町教育委員会は同年9月9日付け越教第392号によって文化庁長官宛通知をするとともに、急遽調査の体制を整え、平成8年9月12日より調査を実施することとなった。この際の範囲が後に述べるA地区である。

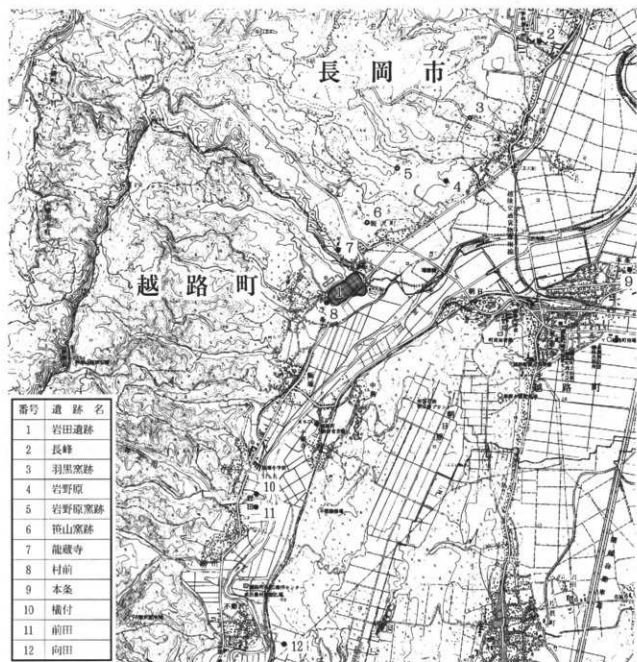
次いで帝国石油は、平成8年10月、施設内に建設する他の施設についても種々検討を重ねたものの、設計上どうしても埋蔵文化財を傷つける工事を避け得ないという結論に達し、町教委に対しB地区およびC地区の追加調査を依頼した。町教委はこの要請を受け、引き続き調査体制を維持することを検討し、承諾した。越教第464号によって新潟県教育委員会教育長宛に変更届を提出するとともに、11月中旬を終了予定に調査を続行することとした。



①新潟県内における位置



②国土地理院発行(長岡) 1 : 200,000 0 10km



③越路全図 1 : 25,000 0 500 1000 1500m

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅱ章 遺跡の位置と第1次調査成果

第1節 遺跡の位置（第1図・第2図）と周辺の遺跡

速く長野県に源を発する洩海川は、越路町から長岡市へと入ったところで信濃川と合流する。ちょうど信濃川が小千谷市から越路町へ下るとともに両岸の展望が開け越後平野の南端に達するように、洩海川も合流地点付近でこの広大な沖積平野に登場する。

遺跡付近は現在でも長岡市と越路町の境界をなすが、中世にあっても太田保と大島荘の境であったと考えられる（註2）。岩田遺跡は洩海川下流左岸の段丘上、まさしく越路町と長岡の境に位置する。長岡市との境界は沢筋となっており、太田谷川が流れる。住所は新潟県三島郡越路町大字沢下条字岩田68番地ほかである。JR信越線来迎寺駅から西方へ2.3km、信濃川と洩海川の合流地点から上流へ6.5km程遡ったところに位置する。

この洩海川下流域の左岸の東頸城丘陵沿いには、奈良～平安時代にかけての遺跡がやや集中して所在する。長岡市蒲堤窯跡、同市羽黒窯跡（第1図③-3）、同市岩野原窯跡（第1図③-5）、同市笹山窯跡（第1図③-6）がそれである。一方で、これらの生産遺跡で製作された土器類の消費地となる集落遺跡としては、長岡市下屋敷、長峰団地西、藤橋、才津館跡、長峰、岩野原（須恵器生産の工房跡？）、龍蔵寺遺跡などが知られるものの、9世紀末から10世紀初頭の下屋敷遺跡でその概要が判明しているほかは、不明な点が多い（註3）。また、洩海川を溯った越路町側にも点々と平安時代の遺物散布地が所在するが、いずれも破片の表採資料だけであり、実態は不明である。

第2節 第1次調査の成果

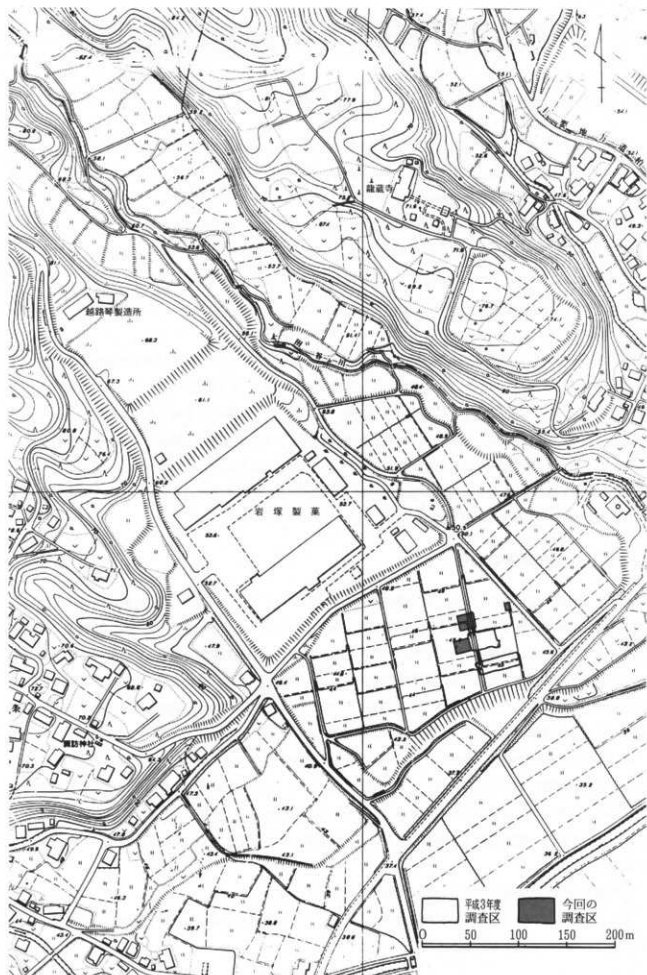
第1次調査は平成3年に行われ、翌4年に報告がなされた（註4）。今回と同じく帝国石油株式会社によるガス井掘削工事に伴うものであった。調査範囲は第2図のとおりである。A・B両地区（これを平成3年度のA・B区と呼ぶ）の調査がなされた。今回の調査区に隣接しやや南東側を調査したものである。

この第1次発掘調査では、4軒の掘立柱建物跡を検出したほか、土坑、溝状遺構、畝状小溝などが発見されている。B区南東端で、他の遺構とは明らかに方位軸の異なる柱穴列および溝跡が発見されている。報告書では大きく3種類の方位軸があるとし、3期の変遷を考えている。

出土遺物は、古式土師器、珠洲焼、近世陶磁器などが少量ずつ出土しているが、主体を占めたのは8世紀代から9世紀前半にかけての須恵器および土師器であり、特に9世紀前半のものが多く出土した。器種は、須恵器には、無台杯、有台杯、杯蓋のほか円面碗が発見されており、土師器では、無台杯、長胴甕、甕などが発見されている。墨書資料もあり、ほとんどは須恵器無台杯の底部に記され、「○」、「新」、「大」、「生」が解読されている。

須恵器資料は胎土分析がなされ、羽黒窯跡との近似性が指摘されている。

また、掘立柱建物跡の柱穴からは柱根が出土しており、これに関しては樹種同定がなされ、主にクリの部材が使用されていることが明らかとなった。



第2図 調査区設定図

第三章 調査の経過

第1節 調査の経過（第1表）

A. 発掘調査

A地区の発掘調査は9月11日から行われた。表土剥ぎによって盛土である山砂の下からはポリエチレンフィルムが一面に敷き詰められているのが確認され、さらにその下位に旧水田面（平成3年以前の水田面）が保存されていることが確認された。山砂およびポリエチレンフィルムは、平成3年の帝国石油による試掘井掘削に伴う盛土であり、前回調査区以外が確実に保存されていることが確認された。また、表土剥ぎに伴って予想以上に水が調査区に侵入して来ることが判明したため、急速前回調査区との境界に矢板を打ち水の侵入を防いだほか、調査区南側に排水路と集水弁を掘削しここから水中ポンプで排水する処置を施した。

9月21日から作業員の協力を得て包含層掘り下げ作業を開始した。確認面としたIV層に青灰色の砂質層と礫層の2種類が存在し、両者の関係が不明であったため、越路中学校教諭の渡辺秀男先生から土層についての所見をいただいた。建物跡、溝状遺構、土坑、柵列などが次々確認される。前回同様地割れの痕跡も発見される。また、平成3年度の調査で発見された4号掘立柱建物跡の一部が確認され、これをH3SB4と称することにした。D地区と呼称した調査範囲は、表土剥ぎの段階で、既に包含層以下の地層が一度深く掘削されており破壊されていることが判明したため、その時点で写真撮影をし調査を完了した。なお、この付近は柔らかい土で覆われており危険なためロープと看板を設置し人が立ち入りできないように処置した。調査は、週末ごとに台風が上陸し、復旧にやや時間を取られたが、ほぼ予定どおり進行した。10月9日にはA地区完掘、全体写真撮影。追って17日に遺構実測も完了した。

やや滞り第1章で述べた追加調査の決定を受け、10月7日にB地区およびC地区の範囲測量。8日から表土剥ぎを開始した。B地区については、A・B3グリッドにあたる部分周辺が以前のほ場整備の際の掘削によるものか水田面がIV層確認面に達しており、包含層を確認できなかった。しかし、残存した面でピットなどの遺構が確認できた。また、C3グリッドで、これまでの調査範囲では見られなかった須臾器のカメ類の集中的な出土を見た。これによりB地区が他の地区とはやや性質を異にする部分である可能性が出て来た。

第1表 作業工程表

	9月	10月	11月
表土剥ぎ	—	—	
包含層調査	—	—	
遺構調査	—	—	
実測	-	—	—

	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
遺物洗浄	—	—									
表記・複合分類・計量		—	—	—							
発掘図面作成				—	—	—	—				
復元				-		-	—	—	—	—	
内図・執筆							—	—	—	—	—
要記分析						-	—	—	—	—	—

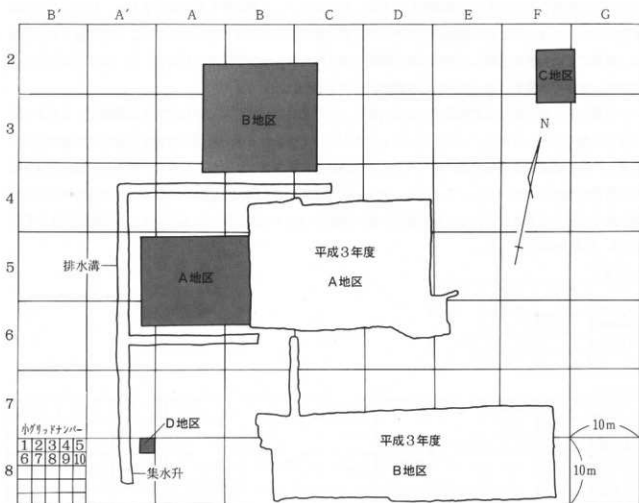
10月22日、SK3と称し土坑として調査していたものが、井戸であることが判明。以後SE1として処理する。10月30日、B地区・C地区完掘、全体写真撮影。10月31日、後片付けのほかSE1のみ写真撮影。11月11日、遺構全体図が完了し、これをもって発掘調査を終了した。

B. 整理作業

整理作業は、既に発掘調査と並行して遺物の洗浄と土壌サンプルの水洗選別を実施していた。本格的な整理作業は、11月18日より場所を越路町郷土資料館に移動して行った。平成8年度中に遺物洗浄、注記、接合、分類、計量、実測、拓本作業がほぼ終了したが、調査担当の都合により以降の写真撮影、復元、遺構図作図、執筆が断続的にしか行えず、やや遅れて平成9年10月に印刷所に入稿した。また、出土遺物の自然科学的分析については、バリノ・サーヴェイ株式会社と4月に協議を行い、5月に委託契約を結び、9月に本報告書掲載の分析結果報告書を提出していただいた。

第2節 グリッドの設定 (第3図)

グリッドは前回の調査を踏襲し、大グリッド(10m×10m)と小グリッド(2m×2m)で調査した。呼称の仕方についても前回のもを使用し、西から東にかけてA'・A・B～G、北から南へ1・2・3～8というように呼称した。小グリッドは北西端から東へ1・2～5と番号を与えていき、次いで1の南に折り返し、6・7～10というように呼称した。また、前節で述べた排水溝をA地区、B地区の南側に掘削し、D地区方向へ集めた。D地区脇に集水弁を設け、ここから排水した。



第3図 グリッド設定図

第IV章 発掘調査の概要

第1節 基本層序 (第4図)

前回の調査の後、帝国石油によって試掘井が掘削されたわけであるが、その際に借用地である調査区周辺に対してポリエチレンフィルムの被覆および盛土がなされた。これが第4図のI層にあたる。II a層以下II層は暗褐色系のシルト層であり、水田耕作にかかわって形成されたものである。また、III層の包含層のトップで遺物破片と小礫が敷き詰められているような状況で出土した。これが遺跡廃絶にかかわるの洪水の痕跡かと疑われ、越路中学校教諭の渡辺秀男先生から現場に来ていただき、所見をいただいた。それによれば自然の営為の洪水とその後の再堆積ではインプリケーションなどの一定の秩序が認められるのに対し、III層トップの遺物および小礫の堆積には何ら秩序が認められない、ということであった。したがって、この堆積の形成には人の行動が関与している可能性が考えられる。また、IV層には、砂質層 (IV層) と礫層 (IV'層) との2種類があり、両者は渡辺氏から同時異層であるとの所見をいただいた。IV'層は第1次調査でもしばしば認められ、今回はB地区の基本土層②の付近からB3-21・22グリッド付近へ竪坑に認められた。

I 層：黄褐色砂質層 (表土)：帝国石油による盛土。下部にポリエチレンフィルムが敷かれていた。

II a層：暗褐色シルト層 (旧耕作土)：2 mm程度の砂利、炭化物を少量含む。

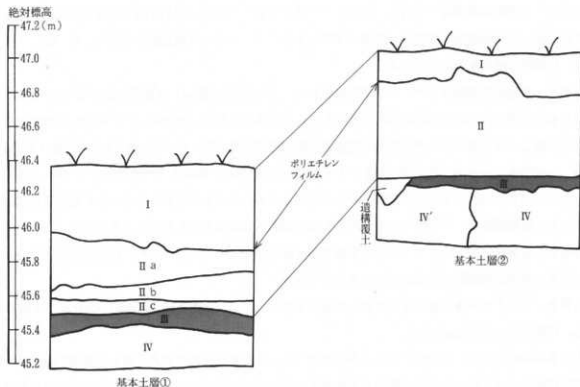
II b層：暗褐色シルト層 (旧耕作土)：II a層より明るい。

II c層：暗褐色シルト層 (旧耕作土)：II a層より茶色がかかる。

III 層：黒色シルト層 (遺物包含層)：II層より明らかに暗い。

IV 層：青灰色砂質層 (地山)：部分的に粘質を呈する部分もある。

IV'層：青灰色砂礫層 (地山)：IV層と同時異層である。



第4図 基本土層

第2節 検出された遺構 (図版1・2・3)

今回の調査では、掘立柱建物跡4軒、溝状遺構8基、土坑3基、井戸1基が発見されている。以下、地区ごとではなく種別ごとに述べる。

A. 掘立柱建物跡

- H3SB4 A地区の南東端で発見された。平成3年度に調査され第4号掘立柱建物跡と呼称されたものの一部である。今回は2基の柱穴が発見された。今回P2とした柱穴の隣から前回ビット7と対応するものが発見されなかったが(右図「○」印)、ここに柱穴があったとすれば、南北3間×東西2間の西側に庇がつく構造となる。
- SB1 A地区の北東、A・B5グリッドから検出された。南北2間(410cm)×東西2間(400cm)の総柱の建物跡である。南北軸はN-45°-Wであり、これは第1次調査で発見された1号~4号掘立柱建物跡とほぼ同様の傾きである。柱間寸法は、東西P7~P9で約2m、南北P3~P6~P9で約2mとほぼ同様である。柱掘形はほぼ四角形を呈し、一辺60cmから70cmが代表的である。なお、本遺構のP2、P3、P8Aからは柱根が出土しており、廃絶時に上屋構造が放置されていたものと考えられる。なお、柱根の樹種同定により、P2、P3はカツラ、P8Aにはクリが用いられていたことが明らかとなっている(第V章参照)。
- SB2 SB1と大きく重なるように検出された。北東部が不明であるが、南北3間(550cm)×東西2間(450cm)の南北建物である。主軸方位はN-34°-Wである。柱間寸法は桁行がP1、P2、P4、P6間で180m~200mとややバラつきが見られ、梁間はP6~P8B~P7で220cm程度である。柱掘形は長方形ないし方形を呈し、SB1と比較して明らかに大きく浅い特徴をもつ。P8ABの切り合いの観察からSB1が新しいことが明らかである(図版3)。
- SB4 A地区の西端A'~A5-21グリッド付近で検出された。南北3間×東西2間の建物跡と推測されるが、大半が調査区外であり詳細は不明である。P1~P3の南北軸の方位は、N-52°-Wである。柱掘形は概ね長方形を呈する。
- SB5 B地区の東側B3グリッドで発見された。南北3間(550cm)×東西2間(335cm)の南北建物である。西側の柱穴が3本調査区内にもかかわらず発見されなかったのは、この付近から西側においては場整備によると思われる削平を受け確認面の絶対標高が低くなっているためである。主軸の方位はN-28°-Wである。柱間寸法は南北P1~P4間で、平均170cm、東西P4~P6間でも170cmである。柱掘形は平面形は略円形を呈し断面形はゆるく立ち上がる。P1およびP3からはカメ類が多量に出土しており、建物廃絶後、柱掘形がほぼ埋没した後に意図的に廃棄されたものと考えられる。
- SB7 B地区北端のB2グリッドで東西2間(300cm)南辺のみ確認された。柱間寸法は160cm~200cmである。大半は調査区外に広がっているものと考えられる。
- SB8 SB7と大きく重なるようにして発見された。同じく東西2間(525cm)の南辺のみ確認された。柱間寸法は約250cmである。



以上の建物跡のほかに、A地区ではその中央付近に、B地区では西側で柱穴と思しき遺構が確認されており、配列は認められなかったものの建物が本調査区に存在した可能性は高い。特にB地区南西端で発見され

たA3-24-P1は柱根が発見されている。

B. 柱穴列

掘立柱建物跡の柱穴よりも平面径の小さい柱穴で、一列に並ぶものを柱穴列と呼称し、SRの後に通し番号を付して名称とした。

- SR1 A地区B5グリッドにおいてH3SB4とSB1・SB2と重複する範囲で発見されている。主軸方位はSB1とほぼ平行し、N-42°-Wである。柱間寸法は平均で175cmである。
- SR2 A地区A~B5~6グリッドで発見されている。SD3と重複し、SD3が新しい。主軸方位はSR1とほぼ平行し、主軸はN-42°-Wである。柱間寸法は60cm~80cmであり、他のSR1およびSR3の状況から立て替えられた可能性もあろう。
- SR3 SR2とほぼ平行し（主軸はN-42°-W）、わずかに30cm程西側で発見された。SK2と重複する。柱間寸法は約150cmである。
- SR4 B地区西側のA3グリッドで発見された。主軸方位はN-40°-W、柱間寸法は平均で200cmである。
- SR6 B地区のB3グリッド付近で発見されている。主軸方位はN-31°-W、柱間寸法は150cmである。柱掘形はやや大きく掘立柱建物跡の柱穴の可能性もある。

C. 井戸・土坑

調査区から1基本の井戸と4基の土坑が発見されているが、このうちSK1北としたものと、SK2としたものは、SB2の柱穴同様長方形の掘こみの浅い柱穴の可能性もある。

- SE1 B地区B3-17グリッド付近で発見された。平面形は卵形を呈し、長径240cm、短径204cmを計る。確認面からの深さは94cmと井戸にしては浅い。付近はIV層が堆積している範囲であり、この礫層中を流れてくる水が調査の掘削に伴って2地点から湧出した（▶印）。4層および5層は非常に堅くしまった砂礫層であり、意図的に埋土されたものと考えられる。おそらくは湧水地点からの水を濾す働きを担ったものであろう。この4層の上に長さ150cmほどの用材を組んだ四角形の井戸枠があり、その外側に東西に踏み板が敷かれ、内側に丸木枠と呼称した平面形態円形に囲むものが認められた。踏み板の上に降り立ち、丸木枠内に溜まっている水を腕を伸ばして汲んだものであろう。これらの用材は、井戸枠クリ、踏み板にハリギリ、モクレン属、丸木枠にスギが用いられており、明らかに使い分けが認められる。また、多岐にわたる遺物が出土している（図版6）。なかでも漆膜の出土は注目され、またV章で述べるように、水洗選別の結果、カナムグラ、イネ、モモ、ブドウ属を含め18種類の種実類が出土している。
- SK1 A地区北西、A'~A5グリッドにおいて発見された東西に長い土坑である。北側でSK1北と呼称した部分は土層断面の観察から別の遺構であることが明らかであり、柱穴である可能性もある。ただし、他の柱穴との配列関係が不明である。またSK1南と呼称した部分と中央と呼称した部分との間にも土手状に高い部分が認められ、ここが別遺構の境界をなす可能性がある。ただし、中央と南の覆土は同一であった。底面にはかなり凹凸が見られる。確認面からの深さは深いところで20cmである。また、底面近くで褐色土層が確認され、これを水洗選別したところ、細かい木片を多量に含んだものであることが分かった。この木片の樹種は固定していない。
- SK2 A地区ほぼ中央A5グリッドで発見された。長方形を呈し、南北150cm、東西100cmを計るが、東側はSD3に切られている。確認面からの深さは20cm。底面はおおむね平坦である。SB2P5のよ

うな大型で浅い柱穴である可能性もあるが、SD2-S D3と連結する一連の境界目的の遺構と考えた。

- SK4 C地区北西端で発見された。東西に長い方形を呈すると考えられる土坑である。一部が調査区外であり、全体の状況は不明である。底面は凹凸が大きく、西側で深い。深い部分の確認面からの深さは30cmを計る。

D. 溝状遺構

- SD1 A地区南東端で発見され、H3SB4の西隣をN-44°-Wの方位で伸びる溝状遺構である。幅約75cm、確認面からの深さ45cmを計る。横断面形は逆台形状を呈する。北端に三角形のテラス状の部分があるが、土層断面の観察からは、溝部分との分離はできなかった。また、数多くの遺物が出土している（図版5）。大小2タイプの有台坏、小治産と思しき無台坏、「田部」と記された坏蓋、転用硯に用いられた平瓶、カメの把手などの須恵器のほか、土鍾も出土している。
- SD2 A地区A～B5～6グリッドで発見された。SR3の西側で、周辺の柱穴列、SD1などと同様の方位N-45°-Wに伸びる。幅40cm、確認面からの深さは15cmである。横断面の形態は逆台形である。
- SD3 A地区A5グリッドで発見された。SR2と重複する。長軸方位はN-40°-Wである。確認面における幅は40cm、深さは20cm、横断面形はゆるく立ち上がるV字状を呈する。

以下、A地区において確認されたSD4～8、C地区で発見されたSD1・2については省略するが、いずれもSD2同様確認面からの深さ20cm弱と浅く横断面形が逆台形を呈する溝状遺構である。

SD4からSD8はSD6を除くとほぼ長軸方位が他の遺構と類似しており、N-45°-W付近に集中する。ただし、SD1～SD3が柱穴列と重複する配置を見せ、集落内の境界を形成する役目を担ったと推測されるのに対し、SD4～8は掘削された位置に境界的な意味合いはなさそうに思える。したがって、SD1～SD3とは性格が異なる溝であった可能性が高い。また、C地区のSD1とSD2は主軸方位がN-30°-W前後であった。

E. 遺物の遺構間接合（第5図）

遺構の同時性を検討するための一手段として、遺構出土遺物に関して徹底的な接合作業を実施した。その接合関係を整理したのが、第5図である。

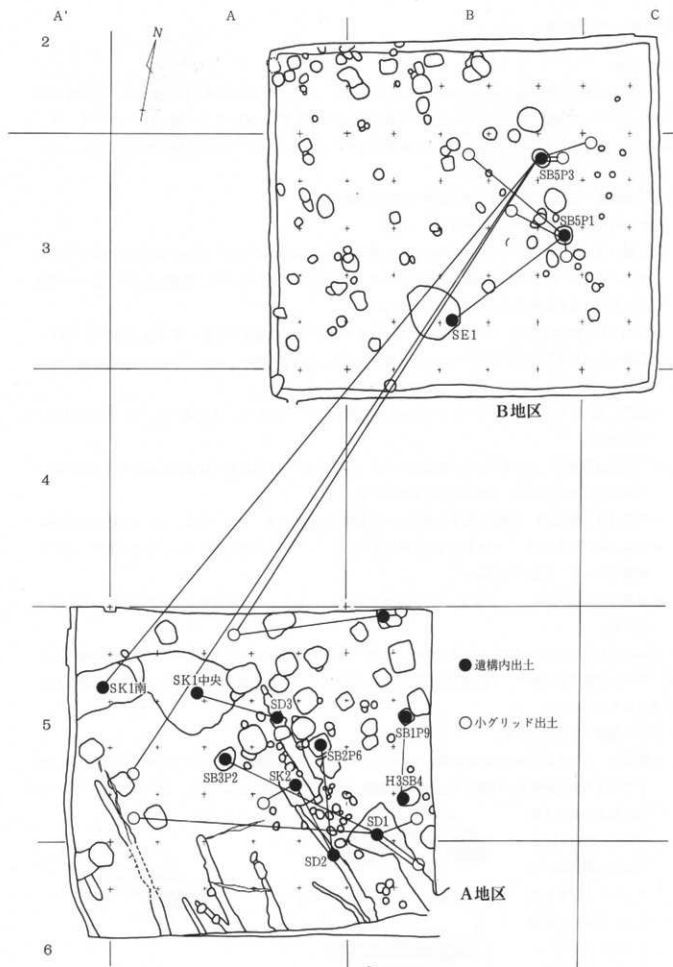
一部を要約する。

SB2とSD2との接合関係が見られる。またSD2とSK2にも接合関係が見られる。したがって、SB2-S D2-S K2は同時存在した可能性がある。もしSD2・SK2とSD3とが連結し同時に存在していたものだとすると、SD3とSK1中央とが接合関係が見られ、同様の覆土をもつSK1南とSB5が接合関係があり、さらにSB5とSE1が接合関係があることから、これらが同時存在した可能性が出てくる。

一方、SB1はH3SB4と接合関係があり、こちらと同時存在した可能性がある。これらは切り合い関係からSB2のグループより新しいものである。

またSR1～3はSB1と空間的に重複し、SD3に切られることから、SB2グループよりもさらに古いものと考えられる。このように方位方向は同様の数値を示す今回の遺構群でありが、大まかに3時期の変遷が把握される。

また、前述のように意図的に遺棄されたと思われるSB5のカメ類の破片がやや離れたSK1南やA5-16グリッド出土のカメと接合しており、注目される。▼



第5図 A地区・B地区接合関係図

第3節 出土遺物

(1) 土器

今回の調査では、須恵器 1,383点 (44,411g)、土師器 4,514点 (32,117g) が出土している。土師器は特に細片が多いのが特徴であり、通常の遺跡では考えられない程完形率が低い。カメ類の出土は多いものの、復元された個体は0である。前回の調査で長胴甕が出土したことと比しても特異な出土状況と言えるであろう。

A. 須恵器 (図版4～8・16～18; 観察表須恵器参照)

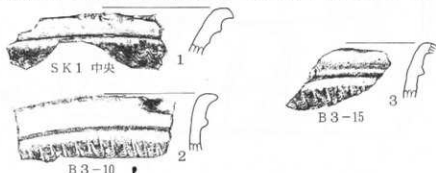
須恵器は次の8種類の胎土別に分類した(註6)。

- A系(地元粗系): 大粒の硬い白色の石を少量含むのが特徴で、ロクロナデの結果器面に顕著なキズが生じ、きたない印象となる。硬焼きのものが多く、灰色～暗灰色が主だが、茶褐色もある。まれに羽黒窯址産のような非常に粗い胎土のものもある。
- B系(地元白色粒子系): 径10mm以内の白色粒子を多く含む。硬焼きで重い。暗灰色。数量的に少ない。
- C径(小泊産系): 顕著な粒子はないが、黒斑がある。硬焼きで薄く、軽い。カメ類は表面に格子状の顕著なタタキ目をもつという特徴を有する(註7)。
- D系(地元硬焼系): ガチガチに硬く焼かれ、磁器化しかかっている。器面はざらつく。非常に細かい黒斑がある。
- E系(地元精系): 胎土が非常に精良でかつずっしりと重い。灰白色及び暗灰色。表面が滑らかに整ったものに代表されるが、ややざらつくものもある。
- F系(地元軟質系): 特別な粒子を含まないが全体的に砂粒を多く含む。軟質。白色～灰色にまとまる。
- G系(白色・A類似): 胎土的にはA類に似るが、色調としては灰色にまとまる。底部を糸キリにする特徴を有する。1点のみ出土した。
- H系(その他・不明): A～Gいずれにも属さないもの。また、あまりに小片で判断できないものを一括した。

大局的に見てA・B・D・F・Gは比較的似ており、粘土の精練の度合いや焼きの違いである可能性もある。Gは、近隣では三島町一の沢窯址の製品が糸キリ手法で製作されており、本遺跡との関係が考慮されるべきであろう(註8)。

以下の器種が出土している。

- 無台坏 立ち上がりが直線的なもの、やや外反するもの、やや内傾するものなど変異があるものの、総じて小型の製品が多く、口径は11cm～14cmの間に、底部径は6cm～9cmの間に、高さは2.5cm～3.5cmの間に収まる(第8図参照)。図版4-1は割れ口周辺にアスファルトが付着しており、補修して使用されたのであろう。図版6-30は非常に



第6図 カメ類口縁部

s = 1 / 3

ゆがんでおり、外側の調整も不十分でかつ焼きも悪い。

- 有台坏 大型と小型の2つのタイプに分かれる(第8図)。口径10cm前後で底部径6cm前後のもの、口径13cm~17cmで底部径10cm前後の2者である。両者ともSD1から出土例があり、ほぼ同時期のものと思われる。
- 蓋 坏蓋と、短頸壺の蓋とがある。両者とも器形の復元できるものが少なく詳しいところは不明である。図版7-49も短頸壺の蓋のつまみと思われる。短頸壺の蓋は今回初めて出土を見た。
- 平瓶 この度の調査で初めて2点が出土した。図版5-21と図版8-61である。どちらも全体の器形が伺えるものではないが、61は図上復元した。21は、破片の端部が強く屈曲しており、このことから平瓶としたが、体部の短い壺の可能性もある。底部に墨跡があり、転用硯として用いられている。
- カメ・ツボ類 破片では、相当数のカメ類が出土している。前回の調査区ではなかった傾向である。ただし、ほとんどが小破片で口径が推定できるものがわずかであり、全体の形が復元できるものは皆無であった。図版4-7の横根に関しては推定復元を行ったが、体部以下は不明である。タタキ、青海波などの手法が認められるものは拓映図を図版9に掲載した。また、口縁部に波状の文様をもつカメも出土している(第6図)。3点とも大型のカメであるが、口径等不明である。胎土からすると、C系の胎土が占める割合が他の器種に比べて高い(37.6%)ことが指摘される。

また、図版7-58は、ツボに含めて集計したが、器種が明らかでない。

B. 土師器(図版4~8・16~18; 観察表土師器参照)

復元個体数が少ないため、一括して述べる。胎土を大きく①比較的良好に精製された粘土を用いたもの。②比較的多量に大粒の粒子が混入するものと2分類した。しかし、両者の中間的なものもあり、便宜的な分類である。

無台坏は碗のような形態のもの、身の浅いもの、身の深いもの、器厚が非常に薄いものなど変異に富むが、数量的にどのような割合を占めるかは不詳である(第8図参照)。碗のような形態のものでは、黒色土師器が2点出土した(図版6-25・26)。いずれも内面のみ黒色処理されたものである。25はSK1南から26はSE1④層から出土している。有台坏が3点、蓋も6点出土している。いずれも小破片のため図化していない。カメ類が非常に少なく、タタキの手法から推定したものが3点出土しているに過ぎない。

(2) 墨書土器(図版4~8; 観察表須惠器、観察表墨書土器参照)

器形実測した遺物については、須惠器の観察表および図版4~7を、器形実測できなかったものについては墨書土器観察表と図版8を参照していただきたい。前回同様に「○」、「大」、「新」、「生」、「衣」などが出土しているほか、今回新たに出土した文字資料もある。まず図版5-16の「田部」は墨ではなくターラしきもので記されている。15も2文字記されているが下の文字が判読できない。緒立C遺跡例(註9)などを参考にすればあるいは「岡本」であろうか。図版6-30は則天文字の「天」である。図版7-39は明瞭に「四」と読める。図版8の65は「東」である。66は「新」であろう。67は文字の上半分が不明であるが、あるいは「仰」、「御」などの可能性がある。68も2文字の資料で、上側の文字は片の一部しか残っておらず、下の文字もつくりの大部分が失われている。あるいは「□殿」など、建物を示す語句であろうか(註10)。

(3) 土製品(図版8 観察表土鍾参照)

土鍾が6点出土している。今回初めて出土した。SD1およびB6-1・2にやまとまって出土している。

掲載遺物観察表

第2表【須恵器】

No	器種	註記	遺構	法 量				遺存度	胎土	手 法	備 考
				口径cm	底径cm	高さcm	重量g				
1	甗台杯	BFSB6-P4	SB6-P4	11.65	6.4	3.6	25	-	F	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	タール接着痕
2	有台杯	AFSB3-P1	SB3-P1	-	(8.4)	-	107	-	A	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	
3	有台杯	AFH3B4-P2A+AFSB1-P9	H3SB4	-	10.8	-	55	30	D	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	
4	有台杯	AFSB3-P2+SD1	SB3-P2	(9.95)	5.8	5.2	91	-	C	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	墨書「〇」
5	有台杯	A下座床H3SB4P2B	SB4P2B	-	-	10.3	115	-	A	内肉:ロコナデ 藍:黒鉄ナシ	墨書・不詳
7	甗 甗	BFSB5P3+B3-5	SB5	13.3	32.5	27.7	1400	30	C	外:磨子状ナシ 内:青釉	
8	タタ	BFSB5-P1	SB5-P1	13.3	-	-	110	-	C	内肉:ロコナデ	火ブクレあり
9	タタ	BFSB5-P3	SB5-P3	29	-	-	303	-	C	外:磨子状ナシ 内:黒鉄釉	
10	タタ	BFSB5-P3+B上B3-5	SB5-P3	32.3	-	-	785	-	C	外:磨子状ナシ 内:青釉	
11	甗台杯	A FSD1	SD1	12.3	7.5	3.45	79	-	A	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	
12	甗台杯	A FSD1	SD1	(12.6)	9.0	3.35	116	-	F	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	
13	甗台杯	A上B5-21+A FSD1+A上B6-2	B5-21	13.6	8.8	3.4	73	45	A	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	
14	甗台杯	A FSD2	SD2	-	(7.6)	-	71	-	A	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	転用硯
15	甗台杯	A FSD1+A下H3SB4-P2B	SD1	12.1	7.5	3.15	65	50	C	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	墨書「岡」カ
16	フタ	A FSD1	SD1	-	-	-	72	-	A	内肉:ロコナデ	タール痕「田部」
17	有台杯	A FSD1	SD1	17.1	9.5	9.8	210	-	A	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	
18	有台杯	A FSD1+B5-21	SD1	10.6	5.8	5.2	7.8	-	C	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	体部下半ロコヘラナデ
19	有台杯	A FSD1	SD1	13.6	10.0	6.6	154	33	B	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	
20	フタ	A FSD1	SD1	-	-	-	216	-	A	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	
21	平 甗	A FSD1	SD1	-	8.3	4.4	123	-	A	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	転用硯
22	タタ	A FSD1	SD1	-	-	-	68	-	D		
23	甗台杯	A FSK1中央	SK1中央	12.8	6.6	3	44	-	C	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	
27	甗台杯	B FSE1	SE1	13.2	8.9	3.1	19	15	A	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	
28	甗台杯	B FSE1	SE1	13.6	(7.2)	3.5	32	-	C	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	
29	甗台杯	B FSE1丸木枠内	SE1	11.6	7.8	3.4	33	25	C	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	指紋あり
30	甗台杯	B上SK3(SE1)	SK3	(13.45)	(9.0)	3.3	66	-	A	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	墨書「天」
31	甗台杯	B FSE1線下層	SE1	-	8.5	-	74	-	E	藍:ヘナキリ	墨書・不詳
32	甗台杯	B FSE1	SE1	-	7.6	-	66	-	E	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	墨書「衣」
33	フタ	B FSE1	SE1	(13.8)	-	(3.1)	96	-	A	内肉:ロコナデ	墨書「×」・転用硯
34	フタ	B FSE1丸木枠内	SE1丸木枠	-	-	-	27	-	E		転用硯
35	有台杯	B FSE1	SE1	14.1	9.1	6.7	153	33	B	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	転用硯
36	有台杯	B FSE1	SE1	-	9.9	-	37	-	A	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	体部下半ロコヘラナデ
37	フタ	B FSE1	SE1	-	-	-	55	-	C	外:ロコナデ	自然軸
39	甗台杯	BFA3-25-P3	A3-25-P3	12.6	9	3.5	176	-	B	内肉:ナシ 藍:ヘナキリ	墨書「四」
40	甗台杯	A上A5-23	-	(11.8)	(7.6)	2.8	34	-	A	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	墨書「生」
41	甗台杯	A上A'5-10	-	(11.1)	8.0	(3.2)	86	-	A	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	墨書「衣」
42	甗台杯	A上B5-21	-	12.4	(5.9)	3.45	72	-	D	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	
43	甗台杯	A上B5-21+B6-2	-	12.9	7.0	3.5	119	-	A	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	
44	甗台杯	B上B3-22	-	-	11.0	-	54	-	E	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	転用硯
45	フタ	A上A5-25+A上B5-21+23	-	-	-	-	161	-	A	内肉:ロコナデ	
46	フタ	A上+A上B6-1	-	-	-	-	88	-	A	内肉:ロコナデ	
47	短頸直 フタ	A上B5-12	-	8.15	-	2.85	95	95	D	内肉:ロコナデ	自然軸
48	短頸直 フタ	A上A5-10	-	11.2	9.0	2.75	17	-	D	内肉:ロコナデ	自然軸
49	フタ	AF	-	-	-	-	-	-	E		短頸直・フタツマミ
51	フタ	C上F14	-	-	-	-	32	-	A	外:ロコナデ	転用硯
51	有台杯	A上B5-21	-	-	7.4	-	59	40	A	内肉:ロコナデ 藍:ヘナキリ	

No.	器種	註記	造構	法 量				遺存度	胎土	手 法	備 考
				口径cm	底径cm	高さcm	重量g				
52	有台坏	A上A'5-16	-	-	5.9	-	17	-	H	内外、ロコナデ 藍へりナリ	
53	有台坏	A上A5-20	-	-	(8)	-	65	-	H	内外、ロコナデ 藍へりナリ	
54	有台坏	B上A2-20	-	-	(7.2)	-	32	-	H	内外、ロコナデ 藍?	
55	有台坏	C上	-	-	(6.8)	-	30	-	E	内外、ロコナデ 藍へりナリ	転用税
56	有台坏	A上A5-19	-	-	5.8	-	40	-	A	内外、ロコナデ 藍へりナリ	
57	ナメ	A上A6-3	-	35.3	-	-	227	-	E	外、ロコナデカサ目ナリ 内、ロコナデカサ目	
58	ソギ	A上A'-10	-	6.5	-	-	249	-	H	内外、ロコナデ	器種不詳
59	ナメ	B上B3-10	-	(27.3)	-	-	67	-	C	内外、ロコナデ	
60	短脚盖	A上B5-21+A5-25+B6-1	-	(9.6)	-	-	401	-	D	内外、ロコナデ	金属うつし・二本沈堀
61	平 瓦	A上A5-3	-	-	-	-	23	10	E	内外、ナデ	自然釉
62	タノ子	A上B5-12	-	-	-	-	54	-	C		

() の数字は推定したもの。 ※遺存度の単位は%である。

第3表【墨書】

No.	器種	註記	造構	法 量				遺存度	胎土	手 法	備 考
				口径cm	底径cm	高さcm	重量g				
65	無台坏	A上B6-1	-	-	-	-	63	-	A		「東」
66	無台坏	A上A5-9	-	-	-	-	21	-	A		「新」
67	無台坏	C上F15	-	-	-	-	17	-	H		不詳
68	無台坏	A FSK1北	SK1北	-	-	-	6	-	C		「口取」カ
69	無台坏	A上B5-21	-	-	-	-	26	-	A		「下」
71	無台坏	A FSD1	SD1	-	-	-	34	-	A		不詳
72	無台坏	B上B3-9	-	-	-	-	4	-	A		不詳
73	無台坏	A上A5-19	-	-	-	-	34	-	A		不詳
74	無台坏	A FSK1中央	SK1	-	-	-	31	-	A		不詳
75	無台坏	B FSE1最下層	SE1	-	-	-	4	-	D		不詳
76	無台坏	A上A5-25	-	-	-	-	6	-	C		不詳
77	無台坏	A FSK1南	SK1南	-	-	-	10	-	C		不詳
78	無台坏	C FSD2	SD2	-	-	-	15	-	C		不詳
79	無台坏	B上B3-22	-	-	-	-	12	-	A		不詳
80	無台坏	B FSE1	SE1	-	-	-	14	-	E		不詳
70	無台坏	A上A5-20	-	-	-	-	37	-	2		土師器「大」

第4表【土師器】

No.	器種	註記	造構	法 量				遺存度	胎土	手 法	備 考
				口径cm	底径cm	高さcm	重量g				
6	無台坏	B FSB5-P2	SBS-P2	(14.4)	(3.2)	3.45	47	40	1	内外、ロコナデ 藍黒施ナリ	
24	無台坏	A FSK1北	SK1北	10.4	5.2	4.4	45	30	1	外、ロコナデ 藍黒施ナリ	
25	無台坏	A FSK1南	SK1南	12.5	5.5	3.95	122	90	1	内へりナリ 外、ロコナデ 藍黒施ナリ	内面黒色土器
26	無台坏	B FSE1最下層	SE1	-	5.2	-	110	-	1	内外、ロコナデ 藍黒施ナリ	内面黒色土器
38	無台坏	B FSE1	SE1	(13.1)	(6.2)	3.6	43	-	1	外へりナリ 藍へりナリ	刻印「×」
63	無台坏	A上A5-20	-	(12.2)	(6.3)	3.3	34	-	2	外、ロコナデ 藍黒施ナリへりナリ	
64	無台坏	A上B6-2	-	12.5	6.8	5.15	135	70	2	外、ロコナデ 藍黒施ナリへりナリ 外、ロコナデ 藍へりナリ 藍へりナリへりナリ	

() の数字は推定したもの。 ※遺存度の単位は%である。

第5表【土 器】

No	器種	註 記	遺 構	法 量				遺 存 度	胎 土	手 法	備 考
				口徑cm	底徑cm	高さcm	重量g				
81	土 壺	A FSD1	SD1	3.6	1.2	7.9	96	-	1		
82	土 壺	A上B6-1	B6-1	1.1	0.45	3.6	3	-	1		
83	土 壺	A FSD1	SD1	1.1	0.3	3.2	1	-	1		
84	土 壺	A上B6-2	B6-2	1.05	0.4	3.15	1	-	1		
85	土 壺	A FSD1	SD1	1	0.4	2.3	1	-	1		
86	土 壺	A上B6-2	B6-2	1.15	0.4	2.3	2	-	1		

第6表【近世陶器】

No	器種	註 記	遺 構	法 量				遺 存 度	胎 土	手 法	備 考
				口徑cm	底徑cm	高さcm	重量g				
69	皿	C上F2-14	C上	11.8	5.0	3.2	72	45	-	砂目	肥前系

(4) 木製品 (図版10)

井戸枠5点、丸木枠(井戸枠の内側に立てられた円形の枠)6点、踏み板(以上井戸関連)5点、木製容器1点、柱根4点のほか、木片類が多量に出土している。

図版10-C・H・E・I・Rは井戸枠である。R以外は側面に2箇所合伏を作り、この部分を組み合わせている。RはIの下の内側に埋められていた。このことから井戸枠が作り替えられた可能性が指摘できる。A・L①L②N・O・Mは丸木枠と呼称した部材である。横断面が弧を描くこれらの部材で井戸枠の内側に円形の枠を作出したものである。D・J・F・G・Kは踏み板である。ただし、FはEの外側でこれを支えるようにして出土している。西側がG一枚の踏み板で構成されているのに対し、東側にD・J・Kの3枚が充てられている。特にKはやや深い位置から出土した。これもRと同じく井戸枠の作り替えを示すものかも知れない。また、ア・イ・ウ・エは丸木枠内上部より出土した用途不明の木片である。

木製容器は、SE1から1点出土している(図版10)。径20cm程度の円形の容器であろうか。

なお、柱根、木片類は図化を省略した。木片類は出土地点、長さ、点数ごとに観察表を作成したが、紙幅の都合で割愛した。

(5) 漆膜 (図版19・23・24)

片面に金属光沢のある紙片状の遺物がSE1③層から出土した。金箔、銅箔の可能性を考えたが、電気を通さず、あるいは樹皮かとも疑われた。蛍光X線分析・薄片観察の結果、漆膜であることが判明した。分析方法などについては第V章に譲る。図版19には比較的大きい破片のみを10点掲載した。破片のなかには縦横とも直線的に破れているものがある一方で、不規則なものもある。最も大きな破片で、4.5cm×4cmである。漆膜もこの度初めて出土したものである。

(6) 近世陶器 (図版8)

図版8-87は肥前系陶器である。砂目が見られ17世紀初頭に帰属する。他に、肥前系京焼風の破片が出土しているが、小破片のため掲載しなかった。いずれもC地区の包含層上端からの出土である。

(7) 古銭

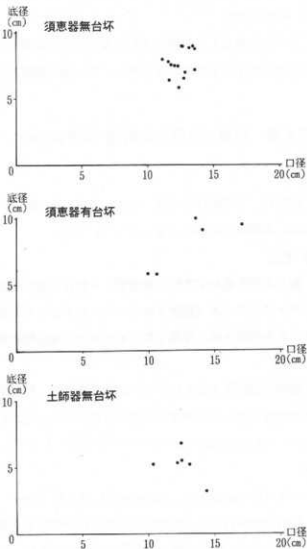
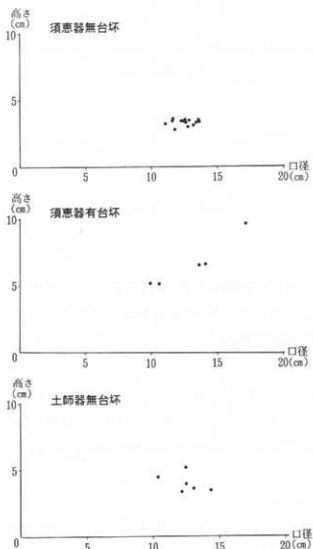
寛永通宝が1点出土している。半分は欠損し、片面は剥落している。

胎土別破片数割合								4片(4.4)	4片(4.4)	92片
A	B	C	D	E	F	G	H			
35片 (38.0)	9片 (9.8)	14片 (15.2)			14片 (15.2)		12片 (13.0)			
								G 1片(0.2)		
								B 4片(0.7)	35片(5.9)	
A	C	D	E	F	G	H				
123片 (20.9)	129片 (21.9)	63片 (30.7)		167片 (28.4)		67片 (11.3)				589片
								6片(6.5)	H 2片(2.2)	
A	C	D	E	F	G	H				
45片 (48.9)			15片 (16.3)	9片 (9.8)	15片 (16.3)					92片
								B 1片(0.2)	33片(6.4)	
A	C	D	E	F	G	H				
115片 (22.3)	194片 (37.6)	48片 (9.3)		60片 (11.6)	65片 (12.6)					516片
								6片(6.7)	6片(6.7)	
A	C	D	E	F	G	H				
24片 (26.7)	13片 (14.4)	39片 (43.3)								90片
								F 2片(2.2)		

胎土別重量割合						88g(3.4)	E 68g(2.6)	
A	B	C	D	F	H			
1,100g (42.2)	413g (15.8)	290g (11.1)		327g (12.5)	323g (12.4)			2,609g
						209g(3.2)	422g(6.5)	307g(4.7)
						G 12g(0.2)		
A	C	D	E	F	G	H		
1,754g (27.1)	946g (14.6)	947g (14.6)		1,878g (28.1)				6,475g
						C 18g(1.3)	H 15g(1.1)	
A	D	E	F	G	H			
838g (59.3)	228g (16.1)	155g (11.0)	158g (11.2)					1,413g
						1,869g(5.7)	2,787g(9.3)	
						B 72g(0.2)	210g(7.0)	
A	C	D	E	F	G	H		
7,359g (24.6)	11,815g (39.3)			4187g (13.9)				3,025g
						171g	171g	
						213g(5.4)	4.7	
A	C	D	E	F	G	H		
1,268g (34.9)	597g (16.2)	1,361g (37.5)						3,631g
						F 21g(0.6)		

第7図 須恵器胎土別グラフ

※ () 内の数字は%を示す。



第8図 須恵器・土師器口径-高さ、口径-底径相関グラフ

第V章 岩田遺跡第2次調査における自然科学分析調査報告

はじめに

岩田遺跡は、渋海川左岸の台地上に立地し、平安時代（9世紀前半～中葉）の集落が検出されている。本遺跡では、第1次調査の際にも自然科学分析を実施しており、住居などの柱材にはクリが多いこと、周囲でモモやイネが栽培されていたこと等が明らかとなった。今回は、以下の調査課題を設定し、自然科学分析を実施した。

第1節 調査課題および分析方法

(1) 柱材・木製品の樹種

出土した柱材や木製品について樹種同定を行い、用材に関する資料を得る。

(2) 種実遺体の種類

井戸から出土した種実遺体について種実同定を行い、植物質食料や古植生に関する資料を得る。

(3) 漆膜の分析

井戸から出土した漆膜と考えられる紙片状の遺物には、表面に金属状の光沢が認められた。この金属状光沢の由来および塗膜の構造等について、薄片観察および蛍光X線分析によって明らかにする。

第2節 柱材・木製品の樹種 (図版20・21)

(1) 試料

試料は、平安時代の遺構などから出土した柱材・木製品など23点（試料番号1～23）である。各試料の詳細は、樹種同定結果とともに表1に記した。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。試料番号5は、散孔材の組織を有する広葉樹材であることは確認できたが、保存状態が悪いため樹種の同定には至らなかった。その他の試料は、針葉樹1種類（スギ）と広葉樹5種類（クリ・モクレン属・カツラ・トチノキ・ハリギリ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2～4個。放射

第7表 樹種同定結果

番号	出土遺構など	時代・時期	用途など	樹種
1	SB1-P8A	9世紀前葉～中葉	柱根	クリ
2	SB1-P3	9世紀前葉～中葉	根柱	カツラ
3	SB1-P2	9世紀前葉～中葉	根柱	カツラ
4	A3-24-P1	9世紀前葉～中葉	根柱	クリ
5	SE1-A	9世紀前葉～中葉	丸木枠	広葉樹(散孔材)
6	SE1-C	9世紀前葉～中葉	井戸枠	クリ
7	SE1-D	9世紀前葉～中葉	踏み板	ハリギリ
8	SE1-E	9世紀前葉～中葉	井戸枠	クリ
9	SE1-F	9世紀前葉～中葉	井戸枠	クリ
10	SE1-G	9世紀前葉～中葉	踏み板	ハリギリ
11	SE1-H	9世紀前葉～中葉	井戸枠	クリ
12	SE1-I	9世紀前葉～中葉	井戸枠	クリ
13	SE1-J	9世紀前葉～中葉	踏み板	ハリギリ
14	SE1-K	9世紀前葉～中葉	踏み板	モクレン属
15	SE1-L	9世紀前葉～中葉	丸木枠	スギ
16	SE1-M	9世紀前葉～中葉	丸木枠	スギ
17	SE1-N	9世紀前葉～中葉	丸木枠	スギ
18	SE1-O	9世紀前葉～中葉	丸木枠	スギ
19	SE1-R	9世紀前葉～中葉	井戸枠	クリ
20	SE1-ア	9世紀前葉～中葉	不明	スギ
21	SE1-イ	9世紀前葉～中葉	不明	スギ
22	SE1-ウ	9世紀前葉～中葉	不明	スギ
23	SE1-④	9世紀前葉～中葉	木製容器	トチノキ

組織は単列、1～15細胞高。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔状で孔圈部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔細胞は周囲状および短接線状。

・モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で管壁厚は中層～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～40細胞高。

・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.) カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔は単独または2～3個が複合、分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～30細胞高。

・トチノキ (*Aesculus turbinata*) トチノキ科トチノキ属

散孔材で管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3(5)個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列する。

・ハリギリ (*halopanax pictus* (Thunb.) Nakai) ウコギ科ハリギリ属

環孔材で孔部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状または対列状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～同性、1～5細胞幅、1～30細胞高。

(4) 考察

樹種同定を行った試料は、堀立柱建物の柱根、井戸の丸木杵、井戸杵、踏み板、木製容器、用途不明品に大別される。

柱根は、クリとカツラが各2点であった。このうちクリについては、第1次調査区で出土した柱根にも多数認められている(註11)。クリが多く利用されている背景には、強度および耐久性に優れた材質を有していることが挙げられる。同様の用材は縄文時代にすでに見られ、古くから適材適所の用材が行われていたことがうかがえる。カツラについては、材に癖がなく加工が容易であること、比較的大径木が得やすいこと等が使用された理由と考えられる。

井戸杵、丸木杵、踏み板には、針葉樹のスギ、広葉樹のクリ、モクレン属、ハリギリ、種類不明の散孔材が認められた。用途によって樹種が異なり、井戸杵は全てクリ、踏み板はハリギリとモクレン属、丸木杵は1点が散孔材で他は全てスギであった。この結果から、材質を考慮した上で用材が行われたと推定される。

木製容器に確認されたトチノキは、椀や皿に現在でも利用される種類である。東京都世田谷区岡本前耕地遺跡の例(註12)のように、縄文時代にはすでに利用されていたことは明らかである。加工が容易であること、大径木が得やすかったこと等の理由により、選択されていたのであろう。

第3節 井戸から出土した種実の種類(図版22)

(1) 試料

試料は、井戸(SE-1)の2層～5層から採取された種実遺体である。試料は各層ごとに6ケースに分けられて採取された。

(2) 方法

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定する。試料は、各層位毎に同一種類をまとめ、容器に入れて保存する。

(3) 結果

結果を表2に示す。以下に検出された種類の形態的特徴を記す。

- ・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura)

クルミ科クルミ属

核の破片が検出された。褐色。大きさは1cm程度。表面は荒いしわ状となり、内側には子葉が入るくぼみが見られる。木質で堅い。

- ・モクレン属 (*Magnolia* sp.) モクレン科

種子の破片が検出された。黒色で大きさは5cm程度。偏平で凸状に膨らむ。下端にへそがある。表面は堅くて薄く、ざらつく。

- ・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラン属

核(内果皮)が検出された。褐色～黒褐色で大きさは2.5cm程度。核の形は楕円形でやや偏平である。基

部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

・カラスザンショウ属 (*Fagara* sp.) ミカン科

核が検出された。黒褐色。大きさは3mm程度。表面には粗い亀甲状の網目模様が見られる。

・アカメガシワ (*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.) トウダイグサ科アカメガシワ属
種子の破片が検出された。大きさは3mm程度。黒色でY字型の小さな「へそ」があり、表面には小さな瘤状隆起を密布する。種皮は薄く硬い。

・ブドウ属 (*Vitis* sp.) ブドウ科

種子が検出された。黒色。大きさは4mm程度。心臓形。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形に深くくぼんだ穴が存在する。背面には中央に「さじ」状の「へそ」があり、「へそ」回りはくぼんでいる。

・ミズキ (*Cornus controversa* Hemsley) ミズキ科ミズキ属

核が検出された。褐色で大きさは4mm程度。縦方向にややつぶれた球形。基部に大きな臍がある。縦方向に走る溝が見られる。

・エゴノキ属 (*Styrax* sp.) エゴノキ科

核の破片が検出された。大きさは数mm程度。表面に浅い溝があり、厚く硬い。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎及び炭化した胚乳が検出された。穎は破片で大きさ4mm程度。褐色で、表面には微細な突起が縦に配列する。胚乳の大きさは4mm程度。胚が位置する部分は欠如し、大きく窪んでいる。表面には、縦に平行な隆起構造が数本認められる。

・カナムグラ (*Humulus scandens* (Lour.) Merrill) クワ科

種子が検出された。灰色で凸レンズ状、大きさは4mm程度。側面の一端に心形の「へそ」が存在する。種皮は薄く光沢がありやや硬い。表面は細かく不規則な凹凸がありざらつく。

・アサ (*Cannabis sativa* L.) クワ科アサ属

種子が検出された。灰色で楕円形、大きさは4mm程度。基部に大きな「へそ」が存在する。種皮は薄く硬く、ややざらつく。2稜がある。

・ナス科 (*Solanaceae* sp.)

種子が検出された。腎臓形で、側面のくびれた部分に「へそ」があり、表面には「へそ」を中心とした同心円状に網目模様が発達する。大きさは2mm程度。褐色。表面は柔らかい。

・トウガン (*Benincasa hispida* Cogn.) ウリ科トウガン属

種子の破片が検出された。楕円形をしており、種皮は厚くやや堅い。縁に段差があり、薄くなっている。

・メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子が検出された。大きさは7mm程度。側面観は楕円形、上面観は扁平な楕円形。表面は比較的平滑で、弾力がある。

・ヒョウタン類 (*Lagenaria* sp.) ウリ科ユウガオ属

種子が検出された。褐色で長さ12mm程度。側面観は長楕円形をしており、周辺の縁の部分の厚い。上面観は扁平である。一端に大きな「へそ」が存在する。

第8表 種実同定結果

種 類	2 層	3 層	4層(丸木枠内)	4層(丸木枠外)	5 層
オニグルミ	2	—	—	—	—
モモ	10	35	—	6	—
コブシ属	—	2	—	—	—
カラスザンショウ属	—	1	—	—	—
アカメガシワ	2	—	—	—	—
ブドウ属	20	10	—	2	—
エゴノキ属	—	1	—	1	—
ミズキ	—	2	—	—	—
イネ (籾)	1	—	—	—	—
イネ (胚乳)	28	55	—	12	—
カナムグラ	多数	多数	3	58	—
アサ	—	1	—	2	—
ナス科	2	—	—	—	—
トウガン	—	1	—	—	—
メロン類	4	2	—	1	—
ヒョウタン類	4	7	—	2	—
センダングサ属	—	2	1	—	—
不明	—	2	—	—	1

・センダングサ属 (*Bidens* sp.) キク科

果実が検出された。大きさは8mm程度。楔形で幅広く、平べったい。先には2本の棘がある。

(4) 考察

検出された種実は3層で最も多いが、その組成は2層・4層でも大きな変化はない。また5層ではほとんど種実が検出されない。

オニグルミ、モモ、ブドウ属、エゴノキ属、イネ、メロン類は可食植物である。このうちモモ、イネ、メロン類は、渡来した栽培種である。モモとイネは前回の調査でも検出されており、栽培の可能性を指摘した(註13)。今回の結果から、新たにメロン類も栽培されていた可能性が出てきた。その他、アサは繊維の材料として、ヒョウタン類は容器などとして有用であるが、これらはいずれも渡来種であり、当時周辺で栽培されていたものと考えられる。これ以外の植物も、周囲の山野に生育していたものと思われる。

検出された草本類のうち、カナムグラ、ナス科、センダングサ属は人里など開けた草地に生育する種類である。特にカナムグラは検出数が非常に多いことから、種子あるいは種子のついた植物体が井戸に投入された可能性もある。一方、木本類をみるとオニグルミ、カラスザンショウ属、アカメガシワ、ブドウ属、エゴノキ属、ミズキなど、林縁部に生育する種類が多い。本遺跡の後背にある山地との境に生育していたものと思われる。

第4節 漆膜の分析 (図版23・24)

(1) 試料

井戸 (SE-1) から出土した、漆膜と考えられる紙片状の遺物1点である。

(2) 分析方法

(A) 蛍光X線分析

蛍光X線分析装置（理学電気工事製：RIX1000）により、 $\mu\text{F} \sim \mu\text{U}$ の範囲の元素定性分析を行った。この方法は試料にX線（一次X線）を照射し、含有される元素が発する固有X線（二次X線）を測定することにより、その成分を知ろうとするものである。

以下に分析方法を記す。

a) 装置

理学電機工業社製RIX1000（定性分析プログラム）

b) 試料調製

試料をポリエチレン膜（6 μm ）で挟み、スナップリングでポリエチレン容器（ケンプレックス製CatNo 1540）上部に固定する。次に容器底部にマイクロポラスフィルム（5 μm ）を固定する。作成したポリエチレン容器試料を装置付属試料ホルダーにセットする。

ブランクとしてポリエチレン膜（6 μm ）から微小のZn、Fe、Crのピークが、また軽元素領域もSi、Caなどのピークが検出されるが、試料からの蛍光X線の方が十分大きいので数十ppmオーダーまでの検出が可能である。

c) 測定条件

X線管；Cr（50Kv-50mA）

試料マスク；30mm ϕ

試料スピン；OFF

ダイヤフラム；20mm ϕ

分光結晶；Lif, PET, TAP, Ge

検出器；F-PC, SC

(B) 薄片観察

試料を型に入れ、エポフィックスを流し込み固化させる。個化した試料を祖切断・チップ作製・基礎面研磨・マウンティング・二次切断・二次面

研磨・カバーリングの順でプレパラート

とする。

プレパラートは、偏光顕微鏡で観察する。

(3) 結果

(A) 蛍光X線分析

定性分析による検出元素および測定強度を第9表に示した。また、F P法によるオーダー分析によって求められた概略の含有量を、一応の目安として示した。

検出された元素は、軽元素領域ではケイ素（Si）、アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）、マグネシウム（Mg）、カリ

第9表 蛍光X線分析による定性分析結果

検出元素（和名）	測定強度（Kcps）	含有率（%）
Al（アルミニウム）	0.237	4.80
Si（ケイ素）	0.757	14.00
Fe（鉄）	2.867	30.00
Ca（カルシウム）	15.632	24.00
Mg（マグネシウム）	0.006	0.62
K（カリウム）	2.561	5.60
P（リン）	0.216	1.30
Ti（チタン）	0.210	1.10
Pb（鉛）	0.087	0.76
Cu（銅）	0.100	0.65
Zn（亜鉛）	0.148	0.73
S（硫黄）	1.359	9.10
Cl（塩素）	0.834	6.60

注）含有率は、F P法によるオーダー分析

ウム (K)、リン (P)、硫黄 (S)、塩素 (Cl)、の 8 元素、重元素領域では鉄 (Fe)、チタン (Ti)、銅 (Pb)、亜鉛 (Zn) の 5 元素である。

③ 薄片観察

試料は厚さが0.2～0.28mmで、3層に分かれる。上層と下層は黒色漆層で、厚さはそれぞれ0.05～0.1mm、中層は0.07～0.1mmの赤色漆層となっている。漆は完全に乾燥していない状態で塗布されたものと考えられ、中層の赤色漆は層状ではあるが黒色漆層の最下部に析出したものか、漆層として塗布されたものかは判断できない。上層の黒色漆層の外側にも透明な物質の析出が認められ、結晶化して異常な内部反射を行っている。

赤色漆層には、微細な赤鉄鉱と判断できる発光が認められることから、ベンガラを混入した赤色漆と判断される。

(4) 考察

試料の表面には、肉眼観察時の所見では漆表面に金属光沢があり、金などの金属が塗布されていると推測された。しかし、蛍光X線分析では、金などのピークは検出されなかった。また、薄片観察の結果でも金などの物質は確認できなかった。

蛍光X線分析で確認されたうち、金色に類する色彩を呈する元素としては、鉄 (Fe) と鉛 (Pb) が考えられる。鉄については黄色を呈する褐鉄鉱が変質または塗料と混ぜ合わせるなどによって、また鉛については密蛇僧と呼ばれる顔料である一酸化鉛 (PbO) によって金色に類した色彩が見えることがある (註 14)。密蛇僧については、金密蛇、銀密蛇と呼ばれる色彩の少し異なるものも認められているが、一酸化鉛 (PbO) は酸化されやすく、変質して白色を呈することから可能性としては低い。また、鉄については、薄片観察の結果から、中層の赤色漆層中に含まれるベンガラを検出したものと考えられる。したがって、金色の光沢は金属質の物質を漆に混ぜたり、漆の表面に塗布したものではないと思われる。薄片観察の結果では、表面に透明な物質の析出が認められ、結晶化して異常な内部反射を行っている様子が観察されている。この乱反射が金属光沢を呈する要因と考えられる。

第VI章 まとめ

1. 新たに 5 棟の掘立柱建物跡が発見されたほか、前回の調査で 4 号掘立柱建物跡とされたものの延長部分が発見された。これで、掘立柱建物跡は合計 8 棟になった。大規模なものではなく、わずかに先の 4 号掘立柱建物跡 (H 3 S B 4) が 3 間×2 間の西側に庇つきの建物である可能性が指摘されるのみである。これらの遺構はおおよそ西へ45度傾いた向きで構築されており、比較的短時期の所産と思われる。出土土器から 9 世紀前葉～中葉に収まるであろう。第 1 次調査同様、柱根が出土したが、これについても樹種同定を行った。前回はクリが大多数を占めたが、今回はクリとカツラが 2 本ずつであった。特に S B 1 は同一遺構ながらクリ (1 例) とカツラ (2 例) と 2 種類の樹木を用いていたことが判明した。
2. 遺構では、井戸が新たに発見された。踏み板と 2 種類の井戸枠を持ち、人が踏み板へ降り立ち腕を伸ばして内側の丸木枠内に溜まった水を汲んだものと思われる。この井戸の用材は、井戸枠にクリ、丸木枠にスギ、踏み板にハリギリというように、使い分けがなされていることが樹種同定の結果明らかになった。
3. 遺構出土土器の接合作業から、①期 S R 1 の柱穴列群→②期 S B 2・S B 5・S E 1・S K 1 中央・

SK1南・SK2・SD1・SD2・SD3などの遺構群→③期SB1・H3SB4の掘立柱建物跡群と変遷する可能性を捉えた。少なくとも3段階の変遷があることは確実であろう。この3段階は第1次調査の際に指摘された〈第2期〉を細分するものである。ただし、今回②期としたものがすべて同一時期であるのかあるいはさらに細分されるものかは不確定要素が多い。また、この③期の後は、柱根などがSB1に残っていたことから、しばらくの間上屋構造が放置されたものと推測した。

4. SB5の遺物（特に大甕類）の出土状況を見ると、柱穴が自然堆積によって半ば埋まった段階で、意図的に集められ捨てられたように見受けられる。またこの遺物が他の遺構から出土したものと接合することも、当時の人間の行動の一端を示すものであろう。
5. 出土遺物では、新たに平瓶、横瓶ほかの大甕類、短頸壺の蓋などの須恵器のほか、土錘、内面黒色土器などの土師器、さらに木製容器が出土した。
6. 新たに発見された墨書土器の文字資料も注目される。「田部」、「岡□カ」、「□殿カ」などの2文字の資料が発見された意義は大きいものであろう。その他「四」、則天文字の「天」などが明確に読める資料として追加された。
7. 井戸から出土した種実の同定によって、当時の周辺景観・周辺環境の一端が明らかになった。モモ、イネ、メロン類の可食植物と、アサ、ヒョウタンなどの有用植物などが栽培されていた可能性が指摘された。また、周辺にはカナムグラ、ナス科、センダングサ属などの草本類が自生し、その後背の林縁部にオニグルミ、カラスザンショウ属、アカメガシワ、ブソウ属、エゴノキ属、ミズキなどの木本類が生育していたことが推定された。
8. 井戸（SE1）から出土した金属光沢をもつ紙片状の遺物は漆膜であることが判明した。
9. B地区において井戸跡が発見されたこと、SB5周辺において須恵器のカメ類が集中して発見されたことから、B地区の一部が厨房機能を備えていた可能性を指摘しておきたい。

注

- 註1 佐藤雅一・石坂圭介 1992 『越路町文化財報告書第19輯 岩田遺跡』越路町教育委員会
 - 註2 長岡高校越路分校歴史部 1972 「中世の越路町—紙屋荘と太田保」『長岡郷土史 第11号』長岡郷土史研究会
 - 註3 坂井秀也・山本章 1992 「第5節 古代の遺跡と遺物」『長岡市史 資料編1 考古』長岡市
 - 註4 註1前掲書
 - 註5 前回の胎土分類を参考にしつつもあらたな分類基準を設けた。
 - 註6 小泊産製品の胎土については、新潟県埋蔵文化財調査事業団の春日真実氏から本遺跡の資料を実見していただいたほか、柏崎市教育委員会の品田高志氏、和島村教育委員会田中靖氏、三条市教育委員会田村浩司氏にもいろいろご教示をいただいた。
 - 註7 前回の報告において一の沢遺跡資料も対比試料の一つとして胎土分析を行っている。それによると一の沢遺跡は不透明鉱物を多く含む点で他の試料との差異が指摘されている。しかし、不透明鉱物を多く含まない試料もあることから、今後も対比作業を続ける必要がある。
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1992「6. 県内出土須恵器薄片作成鑑定」『越路町文化財報告書第19輯 岩田遺跡出土遺物自然科学分析報告書』P. 14~15 越路町教育委員会・パリノ・サーヴェイ株式会社
- 註8 渡辺ますみ 1994 『緒立C遺跡発掘調査報告書』黒崎町教育委員会
 - 註9 墨書土器の解読については新潟大学文学部教授の小林昌二先生のご教示を得た。しかし、文責はあくまでも石坂にある。
 - 註10 パリノ・サーヴェイ株式会社 1992 「岩田遺跡出土材の樹種」『越路町文化財報告書第19輯 岩田遺跡出土遺物自然科学分析報告書』P. 2-4 越路町教育委員会・パリノ・サーヴェイ株式会社
 - 註11 パリノ・サーヴェイ株式会社 1993 「自然科学分析結果」『岡本前耕地』P75-188 都立学校遺跡調査会
 - 註12 パリノ・サーヴェイ株式会社 1992 「岩田遺跡出土種子の種類」『越路町文化財報告書第19輯 岩田遺跡出土遺物自然科学分析報告書』P. 4-6 越路町教育委員会・パリノ・サーヴェイ株式会社
 - 註13 山崎一雄 1990 『古文化財の科学』352P 思文閣出版
 - 註14 理学電気工業 1991 『蛍光X線分析におけるオーダー分析の原理と応用 APPLICATION REPORT 065』理学電気工業

図 版

凡 例

①ビット類の記号は本文では小文字を用いたが、図版中では大文字を使用した。

②土器に付着した墨、タールなどを次のように表現した。



1. 黒色処理した土師器。



2. 墨書



3. 甌などに見られる墨跡



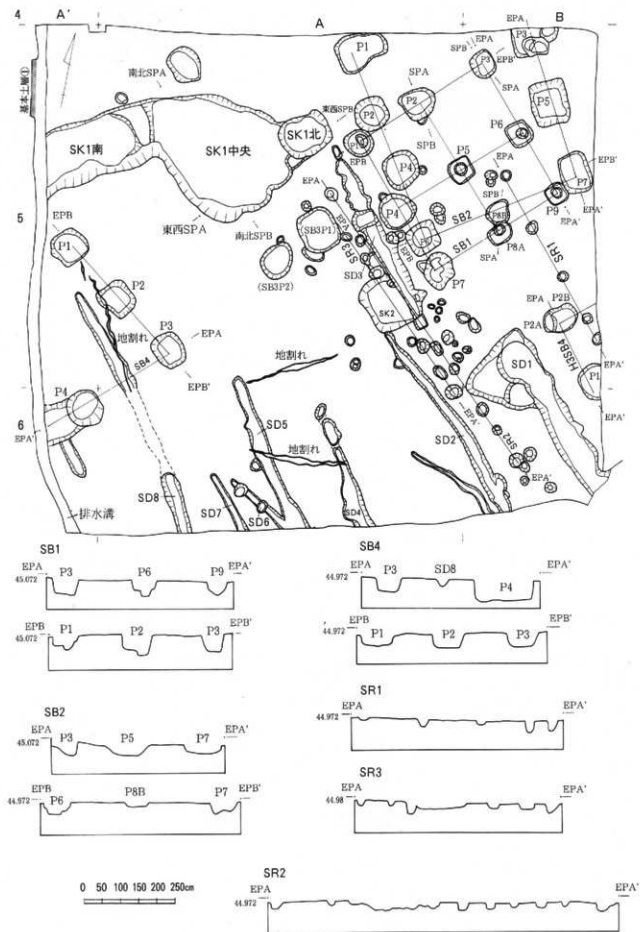
4. タールによる文字



5. タールの接着痕

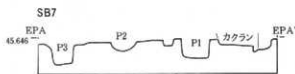
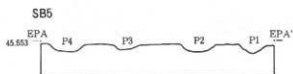
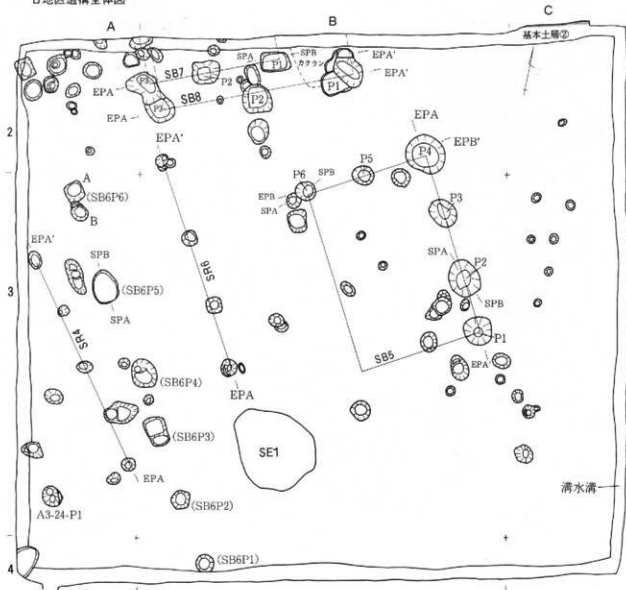
A地区遺構全体図・その他遺構エレベーション図

A地区遺構全体図

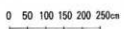


B地区遺構全体図・その他遺構エレベーション図

B地区遺構全体図

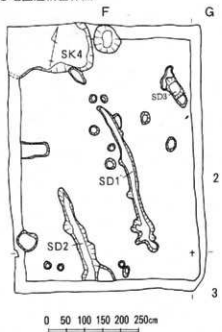


※ () 内遺構記号は最終的な遺構認定から外れたもの

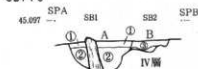


C地区遺構全体図・個別遺構平面図・断面図

C地区遺構全体図

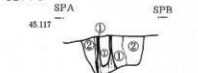


SB1-P8



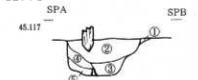
- ① 黒褐色土層
- ② 青灰色土層
- ③ 黒褐色土層
- IV層を多量に含む

SB1-P3

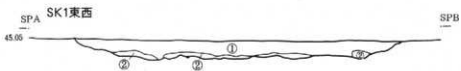


- ① 黒色土層
- ② 青灰褐色土層

SB1-P2



- ① 茶褐色土層別ビット
- ② 暗褐色土層
- ③ 茶褐色土層
- ④ 明灰色土層
- ⑤ 暗灰色土層



- ① 黒色土層
- ② 褐色土層
- 腐食した木片を多量に含む



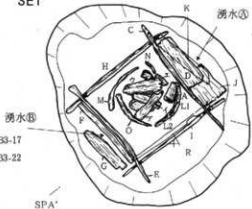
- ① 黒色土層
- ② 青灰色砂質土層
- ③ 黒色土
- ④ 青灰色砂質土層

SB5-P2



- ①a 黒色土層
- ①b 暗灰褐色土層

SE1



SB5-P6



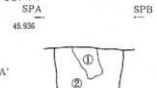
- ① 青灰褐色土層
- ② 黒色土層
- ③ 青灰褐色砂質土層

(SB6-P5)

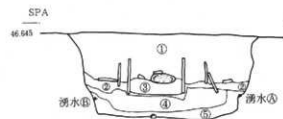


- ① 黒色土層
- ② 黒色土層
- ③ 青灰色土層

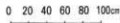
SB7-P1



- ① 青灰褐色砂質土層
- ② 黒色土層

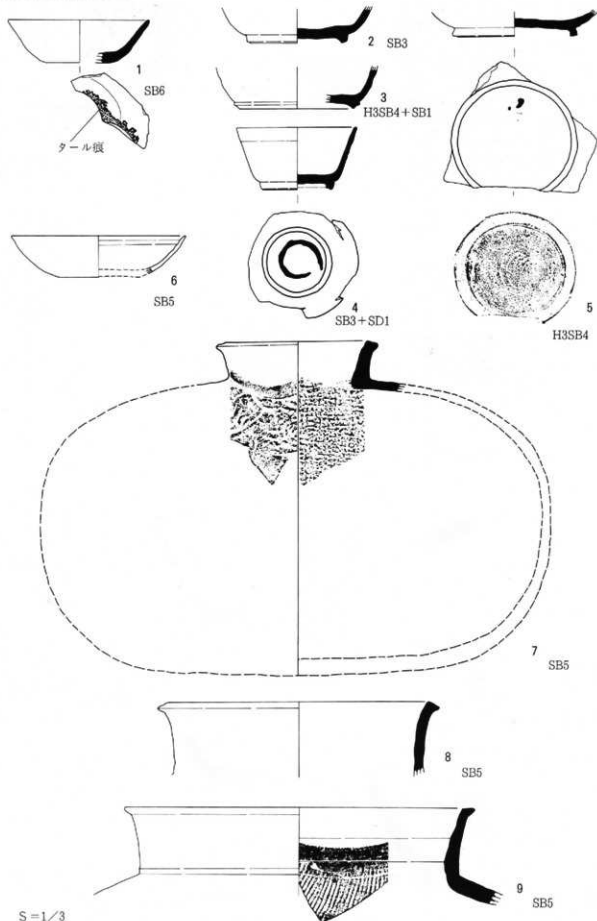


- ① 黒色土 砂礫を多く含む
- ② 黒色土 砂礫を含まない
- ③ 青灰色砂礫層
- ④ 黒色砂礫層
- ⑤ 暗褐色砂礫層



出土土器実測図(1)

堀立柱建物跡出土土器



出土土器实测图(2)



沟状遗構出土土器

10
SB5



11
SD1



12
SD1



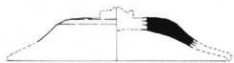
13
SD1



14
SD2



15
SD1



16
SD1



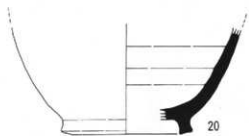
17
SD1



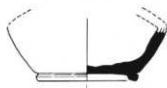
18
SD1



19
SD1



20
SD1



21
SD1

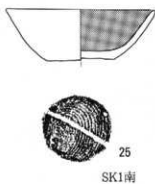
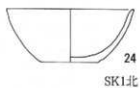
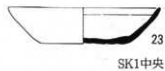


22
SD1

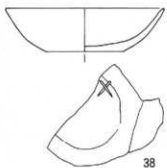
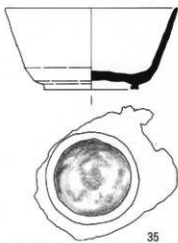
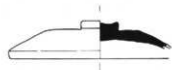
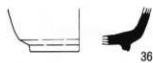
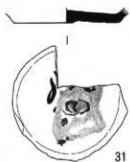
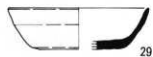
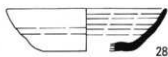
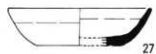
S=1/3

出土土器実測図(3)

土坑出土土器



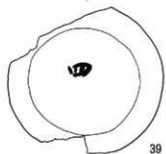
井戸跡出土土器 (すべて SE1 出土)



S=1/3

出土土器実測図(4)

その他遺構・包含層出土土器



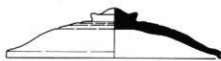
39



42



43



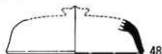
45



46



47



48



49



50



40



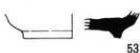
41



44



51



53



55



56



52



54



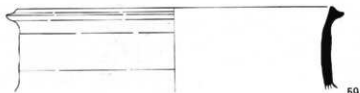
57



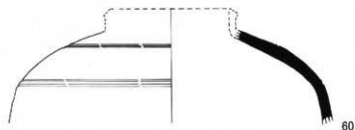
58

S-1/3

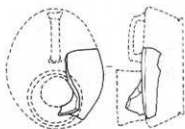
出土土器実測図(5)、墨書土器、土鍾、近世陶器実測図



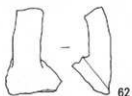
59



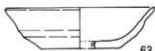
60



61



62



63



64

墨書土器



65



66



67



68



69



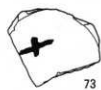
70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80

土鍾・近世陶器・貨銭



81



82



83



84



85



86



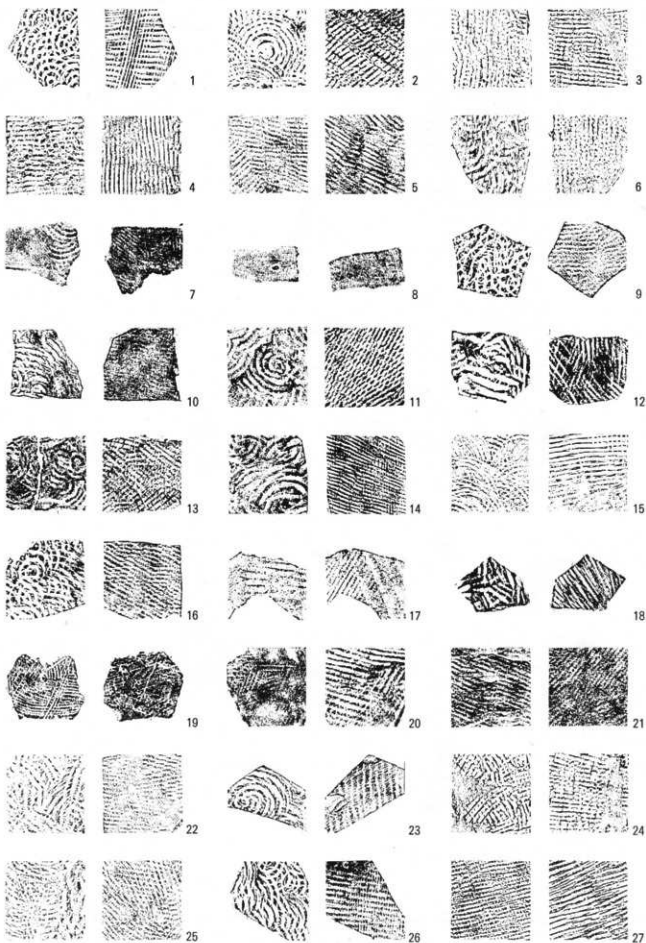
87



89

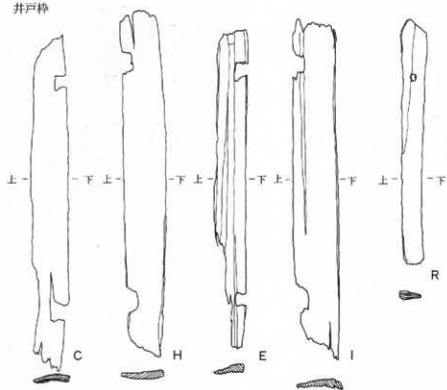
S = 1/3

カ×類拓映図

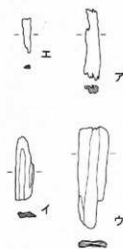


井戸杵、木製品実測図

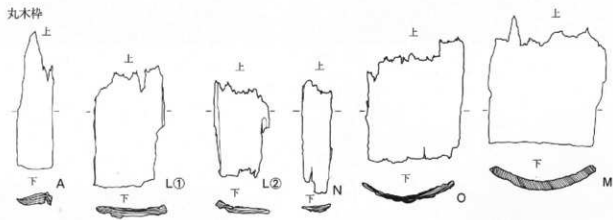
井戸杵



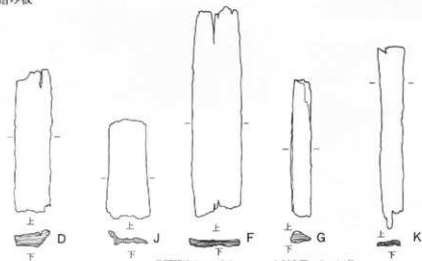
丸木杵内出土木片



丸木杵



踏み板



木製容器



井戸杵通 S=1/17

木製容器: S=1/3

遺跡遠景・近景



遺跡・遠景（東より）



遺跡遠景 対岸（東）から



遺跡遠景 北東から



遺跡遠景 西から

作業風景・基本土層



A地区作業風景 西から



A地区作業風景 南東から



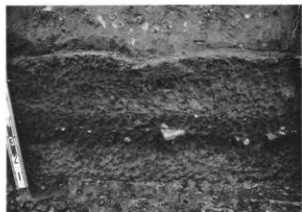
A 6区 作業風景



SD 1 作業風景



A地区作業風景 南東から



基本土層①

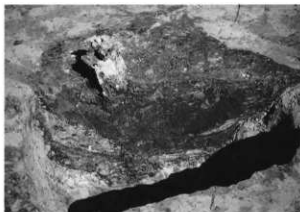


基本土層②

個別遺構等



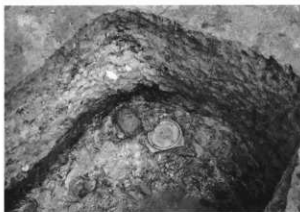
SB1-P3 半載状態 北西から



SB1-P2 半載状態 南から



SD1 有台杯出土状態 北から



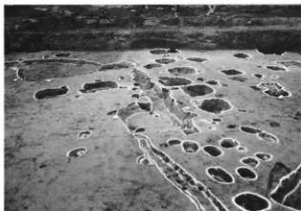
H3SB4P2 有台杯出土状態 東から



SB1・SB2 完掘状態 北から



SK1周辺 完掘状態 北から



SK2・SD2 完掘状態 南から



SK2 完掘状態

個別遺構等



地割れ確認状態 東から



A地区完掘状態 東から



A地区完掘状態 西から



SB5-P1 遺物出土状態



SB5-P3 遺物出土状態



SB5-P1 半載状態 西から



SB5-P3 半載状態 西から

個別遺構等



SE1 井戸枠確認状態 西から



SE1 井戸枠検出状態 北から
(竹串は支えのため刺したもの)



SB5 付近 完掘状態

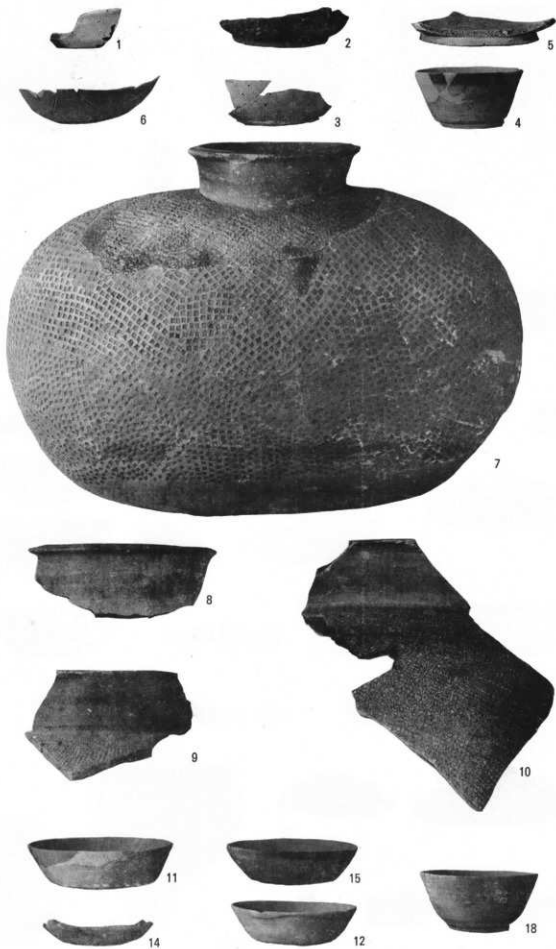


SB6・SB7 付近 完掘状態



C地区完掘状態 西から

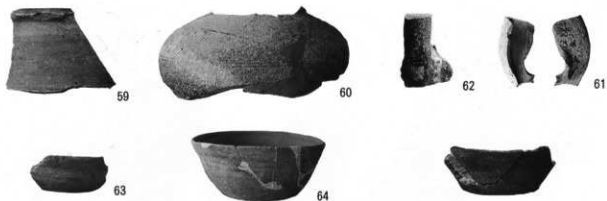
出土土器(1)



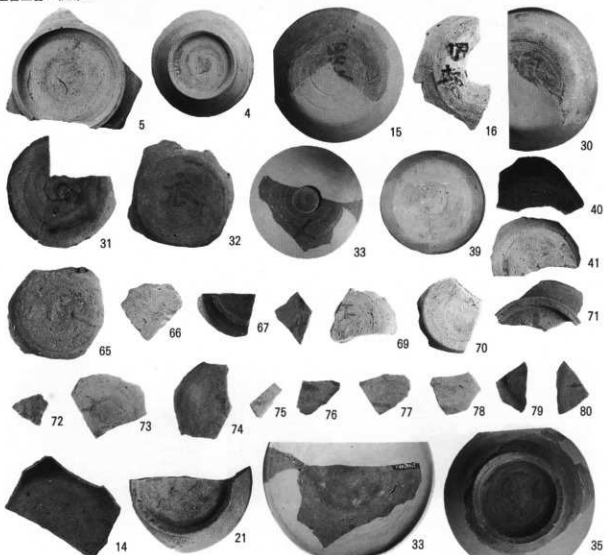
出土土器(2)



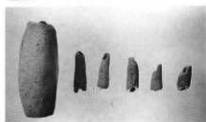
出土土器(3)



黒書土器・転用硯



土錘



近世磁器



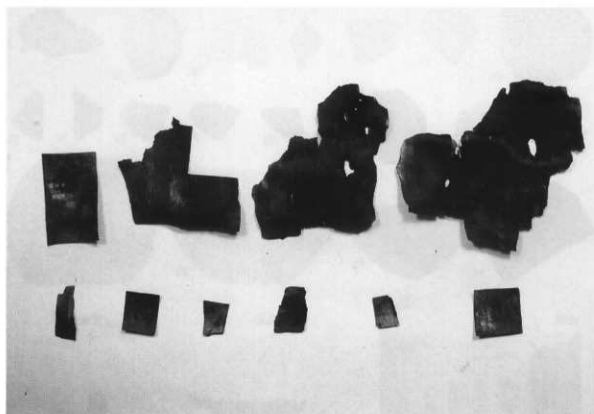
寛永通宝



漆 膜

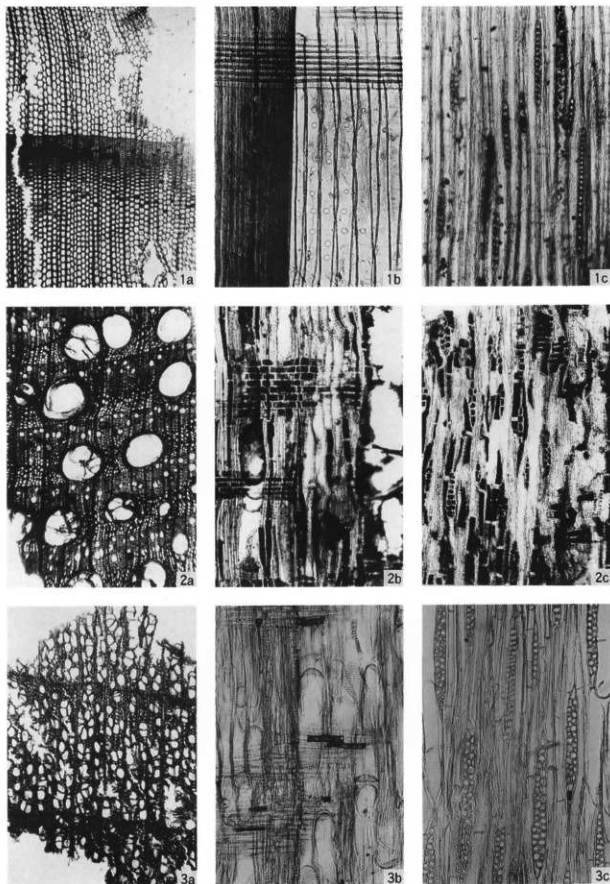


漆 膜（金属光沢のある面）



漆 膜（金属光沢のない面）

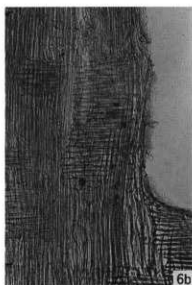
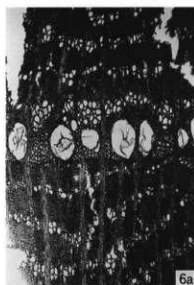
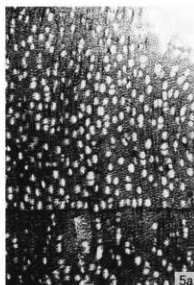
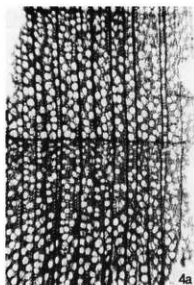
木 材(1)



1. スギ (試料番号21)
 2. クリ (試料番号19)
 3. モクレン属 (試料番号14)
 a: 木口, b: 柱目, c: 板目

■ 200 μ m : a
 ■ 200 μ m : b, c

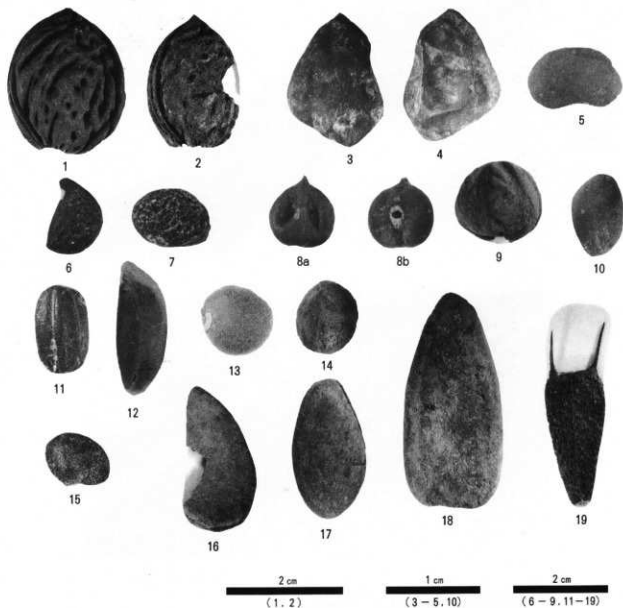
木 材(2)



4. カツラ (試料番号3)
 5. トチノキ (試料番号23)
 6. ハリギリ (試料番号7)
 a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200 μ m : a
 200 μ m : b, c

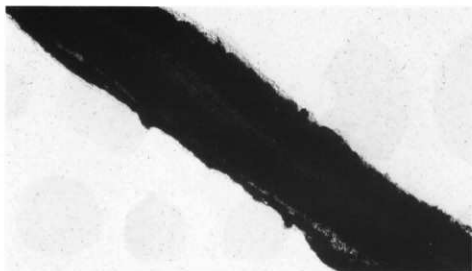
種 実



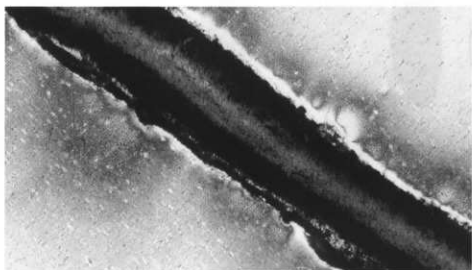
1. モモ (SE-1 ; 3層)
3. オニグルミ (SE-1 ; 2層)
5. コブシ属 (SE-1 ; 3層)
7. アカメガシワ (SE-1 ; 2層)
9. ミズキ (SE-1 ; 3層)
11. イネ : 稃 (SE-1 ; 2層)
13. カナムグラ (SE-1 ; 3層)
15. ナス科 (SE-1 ; 2層)
17. メロン類 (SE-1 ; 2層)
19. センダングサ属 (SE-1 ; 3層)

2. モモ (SE-1 ; 3層)
4. オニグルミ (SE-1 ; 2層)
6. カラスザンショウ科 (SE-1 ; 3層)
8. ブドウ属 (SE-1 ; 3層)
10. エゴノキ属 (SE-1 ; 3層)
12. イネ : 胚乳 (SE-1 ; 2層)
14. アサ (SE-1 ; 4層 : 丸木枠外)
16. トウガン (SE-1 ; 3層)
18. ヒョウタン類 (SE-1 ; 4層 : 丸木枠外)

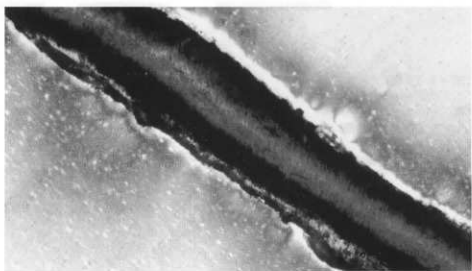
漆 膜(1)



下方ポーラー



直交ポーラー

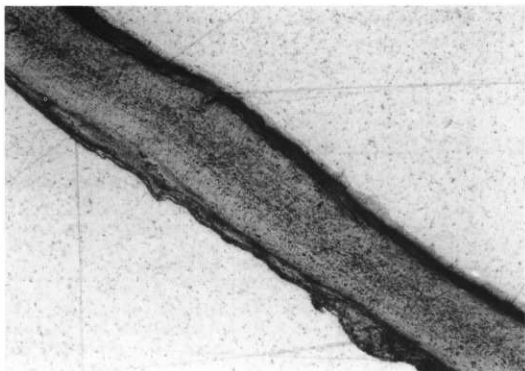


直交ポーラー

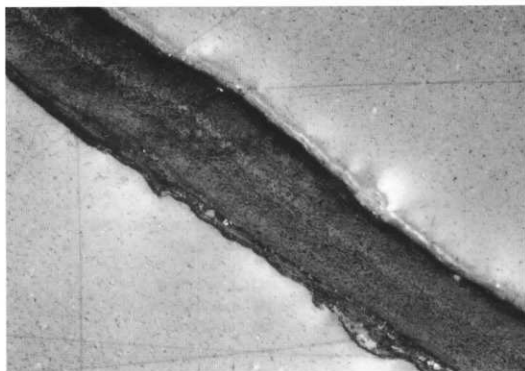
SE-1 膜

0 0.2 μ m

漆 膜(2)



下方ポローラ



直交ポローラ

SE-1 膜



岩田遺跡第2次発掘調査報告書正誤表

頁	行	誤	正
例言中	1. 11	小林昌可先生	小林昌二先生
例言中	1. 17	北村 透	北村 亮
p. 5	1. 22	集中的なの出土	集中的な出土
p. 13	1. 8	伺える	窺える
p. 13	1. 18	用いたもの。	用いたもの、

報告書抄録

書名	岩田遺跡第2次発掘調査報告書						
シリーズ名	越路町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第21編						
編者・著者	石坂圭介						
編集機関	越路町教育委員会						
所在地	新潟県三島郡越路町大字浦715番地 TEL.0258-92-4655						
発行年月日	西暦 1997年 11月 30日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号				
岩田遺跡	新潟県三島郡越路町 大字沢下条字岩田	15-401	10	37度 138度 23分 45分 43秒 39秒	1996. 9.11 ～ 1996.11.11	538	天然ガス井 掘削工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
岩田遺跡	集落 (里長ク ラスの館)	平安時代 前葉	掘立柱建物跡 井戸 土坑 ほかに溝、柱穴列など	5棟 1基 3基 の柱根	須恵器・土師器・木製容 器・漆椀・掘立柱建物 の柱根	墨書土器で2文字の資 料が3点出土。明確な ものは「田部」と認め る。	

越路町文化財報告書第21編
岩田遺跡第2次発掘調査報告書

平成9年11月30日印刷

平成9年11月30日発行

越路町教育委員会

新潟県三島郡越路町大字浦715番地

電話 0258(92)4655

印刷 あかつき印刷㈱

住所 新潟県長岡市新産4-4-7

電話 0258(46)9393

